city & life

都市のしくみとくらし

no.117
Jul-Oct 2016

特集 建築とまちづくり

city&life no.117 Jul-Oct 2016

巻頭言

「町」としての建築へ

建築には「逆風」が吹いている。バブル期、華やかな商業建築が林立し、たくさんの民間プロジェクトが行われた時代が去って久しい。

だがそのなかでも、最近誕生している「建築」は、従来、デザインの新奇性や建築家の独立性・独創性が話題となり、そのことが町に活気を与えると考えられたものとは異なるようだ。建築が成り立つ土地の歴史や風土、住民との対話を設計プロセスに取り込み、建物単体よりも、むしろその周辺環境をデザインするような「建築」が増えている。具体的には、人々が自然と集うことを意図した「複合(complex)」施設で、町に対して威圧感のない「水平(horizontal)」な構造をもつ。また、内部空間と外部空間の「連続(sequence)」を意識するもの、分棟方式の、まるで多島海を巡るように回遊することを前提とした事例も少なくない。

ではなぜ、そのような変化が生じたのか。一つ、公共施設の複合化の背景には、限られた予算を効率的に使い、異なる目的で訪れる人々を自然と集わせようという、人口減少や税収減対策といった面もある。あるいはこの5年、いわば東日本大震災以降の傾向とも見えることから、少なくともクライアントや設計者の意図のなかに、このことが影響しているとも考えられる。

そこで今回は、建築が、新たな方法でまちづくりに携わり始めた今、そこから開かれる可能性とその背景にあるものについて考えていく。（編集部）

表紙――「食堂付きアパート」
photo:新井卓（関連記事:p11）
裏表紙――「みんなの森　ぎふメディアコスモス」
photo:坂本政十賜（関連記事:p6）

特集　建築とまちづくり

contents

寄稿｜建築と町の新しい関係｜五十嵐太郎　2

ケーススタディ｜町に開かれた建築
みんなの森 ぎふメディアコスモス 行政の中心から町をつなぐ結節点へ　6
食堂付きアパート「小さな経済」を地域に循環させる　11
鶴ヶ島太陽光発電所環境教育施設「eコラボつるがしま」
工場跡地を環境・防災・地域の拠点に　16
女川駅前にぎわい拠点／シーパルピア女川 中心市街地から復興の狼煙をあげる　21
真壁伝承館 町の歴史を映す公共建築のかたち　26

連載｜スキマファイル⑧｜見上げればスキマ 大東京天空庭園巡り　30

連載｜子どもたちの「笑顔」に会いに行く⑧｜　34
リーゴ正保保育園「園庭を緑豊かな小さな森に」
ひよし保育園「体験から学ぶ、自然いっぱいの園庭」

back number · information　38

寄稿

建築と町の新しい関係

五十嵐太郎

photo:五十嵐太郎

忌避される巨大な国家建築

ザハ・ハディドの新国立競技場案が、膨大な建設コスト、神宮外苑の景観問題などによって批判され、2015年7月に白紙撤回が決定された。1964年の東京オリンピックのときの国立代々木競技場も、実は予算が足りず、設計者の丹下健三が直接、田中角栄大蔵大臣(当時)に掛け合って増額されていた。現在、建築家が同じことをすれば、スキャンダルになるだろう。高度経済成長期には、建築家は民衆に対して啓蒙的にふるまい、力強い造形によって民主主義の空間を提供した。だが、新国立競技場が迷走したように、現在の日本では有名建築家によるモニュメンタルな国家プロジェクトが成立しにくくなっている。

そもそも国家建築の決定に民意を反映させることは難しい。一方、県、市、町レベルの公共施設であれば、知事選や市長選などにおいて、特定のプロジェクトが選挙の争点になり、推進か中止かが決定されることがある。ときとして政争の具になるとはいえ、民意を反映するシステムとして機能している。だが、経済や外交の政策など、大きな指針を決める国政選挙で同様のプロセスが起きることは想像しにくい。実際、白紙撤回も、国民投票ではなく、安倍首相が「英断」したことになっている。また多くの反対の声を押し切って、安保法案の強行採決の直後にキャンセルが決定され、メディアの注目が競技場に集中したことを考えると、二つの出来事が無関係と考える方が不自然だろう。過剰なスペックやプログラムを要求した発注者側の日本スポーツ振興センター(JSC)や、震災復興とオリンピックが誘発した建設ブームなどに大きな問題があるにもかかわらず、デザインのせいで建設コストがはねあがったというわかりやすい言説が、大衆の心をとらえ、魔女裁判の様相を呈していた。

この事件は従来の建築家の立場が立ち行かなくなっていること、周囲から目立つ巨大建築が嫌われていることを象徴的に示した。国家建築の場合、個別のユーザーの顔が見えない。だが、小さい単位のコミュニティでは、新しい動向が目立つようになった。

地域再編に伴う複合施設

筆者とコミュニティデザイナーの山崎亮がゲスト・キュレーターを務めた「3.11以後の建築」展(金沢21世紀美術館、2014－15年)は、同時開催された「ジャパンアーキテクツ1945－2010」展が彫刻的なオブジェとして建築をとらえるのに対して、社会との関わりを重視し、町と新しい関係をつくる地方の建築に注目した。

例えば、「使い手とつくる」のセクションでは、ワークショップ的な手法を扱う。21世紀に入り、日本建築学会賞(作品)でも、古谷誠章の茅野市民館(2005年)や西村浩の岩見沢複合駅舎(2009年)など、ワークショップを組み込んだ複合施設が選ばれるようになった。3.11展では、青木淳の十日町、乾久美子の延岡のプロジェクトもワークショップを行っている状況を紹介したが、ルイ・ヴィトンの店舗を手がけるような従来のスター建築家もまちづくり的な手法に関与している。伊東豊雄も被災地に人々が寄り添うみんなの家のプロジェクトを展開し、松本市の新聞社の新社屋では山崎亮が入り、ワークショップを行う。

「使い手とつくる」では、新居千秋や藤村龍至をとりあげた。新居による大船渡のリアスホール(2008年)では、東京の事務所から遠い地方だったが、行政と市民を巻き込んだワークショップを50回以上開催した。当初はホール中心の建物が計画されていたが、図書館を望む意見が多いことから、両方を複合した文化施設に変更され、公演がなくとも、普段から人で賑わう場所となった。また最初のプランは、簡単な矩形のヴォリュームから始めるが、参加者の意見を取り入れながら、形態が大きく変化し、最終的には個性的な造形のデザインに至る。なお、これは3.11の被災時は居住の場となり、避難所としても機能した。

秋田の由利本荘市文化交流館カダーレ(2011年)、新潟市江南区文化会館(2012年)は、ともに新居が手がけたホールをもつ複合施設である。前者は屈曲した通路のまわりに図書館、プラネタリウム、ギャラリー、物産館など、後者は十字のストリートのまわりに図書館、郷土資料館、公民館などを配置し、単体の建物ながら、都市の街路を歩くような内部空間だ。イベント的に使われるホールと、常に人が滞在する図書館の合体は、都市的なにぎわいを与える。蔦屋(TSUTAYA)も書店＋商業施設を展開しているように、本は人を集めるキラーコンテンツと言えるだろう。また新居による建築の各部屋は小窓を設け、空間を相互浸透させることで、互いに見る/見られるの関係をもたらす。これらは旧施設の建替えに伴い、点在していた異なる施設をひとつにまとめているが、コンパクト化と複合化は、現在の地方都市において財政の負担を軽減する、効率的な公共施設の運営にも寄与している。

カダーレでは、ホールの座席パターンは様々に変形する。さらに、これを収納して、前後のホワイエやギャラリーの可動壁も取り払うと、前後の道路から建物を貫通する130mに渡る大空間が出現し、スポーツのイベントのときなどにこうして利用する。住民がこの建物のPR映像を自主的に制作しているように、カダーレは愛される公共施設になっている。

藤村龍至は、市民投票の形式を採用し、集合知を集積するシステムを開発した。鶴ヶ島太陽光発電所環境教育施設eコラボつるがしま(工藤和美と共同設計、2014年)では、研究室の学生に様々なパターンの建築模型を制作させ、集会で住民による人気投票を行う。

●茅野市民館(2005年)

●岩見沢複合駅舎(2009年)

●大船渡市民文化会館・市立図書館
リアスホール(2008年)

●由利本荘市文化交流館カダーレ(2011年)

●江南区文化会館(2012年)

●鶴ヶ島太陽光発電所環境教育施設eコラボつるがしま(2014年)

投票の結果やコメントは検討され、良い点を反映・融合しながらフィードバックし、また複数の模型をつくり、投票を繰り返し、最終的な統合案に向かう。言葉では専門的な意見が言えなくても、どれかの案に投票するハードルの低さは、多くの人の参加をうながすだろう。完成した建築は、一点突破の明快なデザインではなく、環境への配慮、シンボル性、バス停の待合所としての機能性など、多くの異なる要素を複合する。また最後の塗装の仕上げでは、周辺の住民に参加してもらい、将来にわたってのメンテナンスの方法を体験することで、業者に依頼しなくても、自らの手でできるように考慮した。

町に開かれた低層の建築

かつての庁舎建築はしばしば高い塔屋をもち、町のランドマークになっていた。地方都市では城址が敷地になるケースも少なくない。政治の体制は近代化されても、城のイメージが残っていたのかもしれない。西洋とは違い、ほとんどが平屋だった日本の町並みにおいて、複数の層をもつ城は間違いなく、もっとも高い建築だった。実際、高さというのは、一般の人にとってわかりやすい指標だろう。以前、筆者が審査員を務めたある地方都市のコンペにおいて、地元の審査員全員がデザインの良し悪しに関係なく、もっとも高い建築という理由だけである案に投票していたことは印象的だった。

しかし、逆に言えば、高さは目立つがゆえに、メディアから叩かれやすい要素になるだろう。新国立競技場案もそうだった。被災地の宮城県七ヶ浜町では、コンペによって二つの公共施設が誕生した。矩形の中庭を特徴とする高橋一平による遠山保育所（2013年）と、随所にリトルスペースを設けた乾久美子による七ヶ浜中学校（2015年）だが、いずれも小さなスケール感を強調していた。むろん、子供の施設ゆえのサイズでもあるのだが、まわりの家より低く、明らかに高さを抑えたデザインと言えるだろう。

高いことで注目を集めると、反感を買いやすい。被災地の復興では、焼け太りという批判をおそれてか、あまり建築が目立たないことが求められる風潮さえ感じられる。ただし、こうした傾向は、今に始まったことではなく、バブル経済が崩壊した1990年代の途中からハコモノ行政批判とともに起きていた。派手なポストモダンからシンプルなモダニズム回帰へ。これを見事に体現したのは、隈研吾だろう。肥大化したイオニア式円柱をもつM2は、まさに東京のポストモダン・バブル建築を象徴したが、その後、彼は「負ける建築」を提唱しながら、地中に埋めて存在感を隠した建築や、ルーバーを多用したミニマルなデザインを地方において展開した。アオーレ長岡（2012年）は、塔屋をもたず、人々で賑わう広場を抱え込みながら、町に開かれた市庁舎を空間として実現している。

青木淳による杉並区大宮前体育館（2014年）は、ヴォリュームを掘り下げ、まわりの住宅よりも低い。屋根の高さはおよそ5m、2階建ての家以下である。コンペではもっとも低い案だった。その結果、緑化された屋上に登ると、見たことがない町の風景が広がる。これだけ広い屋上だと、通常は高い視点のはずなのに、とても低いからだ。体育館が目立つのではなく、環境に配慮し、町を引き立てるような建築である。体育館とプールの輪郭は楕円に近い形状で、適度な長さで分節したガラス面をズラしながら反復させることで、小さな家が並ぶ周囲のスケール感にあわせる。体育館とプールを二棟に分けたのも、大きなヴォリュームとせず、そのあいだを通り抜けできる公園のような場とするためだ。かつてこの敷地にあった小学校は背後の住宅地に影を落としたが、新しい体育館は4本の大銀杏を残しながら、環境を改善する。建築が一歩引いて、周辺に貢献するデザインだ。

小さくて、かわいい建築

ヴォリュームを小分けして、分棟形式にする傾向も目立つ。例えば、西沢立衛による十和田市現代美術館（2008年）は、それぞれに常設のアート作品を配した大小のヴォリュームをガラスの回廊でつなぐ。これは大きな円のなかに様々なホワイト・キューブを並べた金沢21世紀美術館のリングがはじけ、街路沿いにあふれだしたと解釈できる形式であり、発展形といえるだろう。建築を分棟の集合体とすることは、いわば都市に見立てることであり、また周辺環境にあわせて、それぞれのヴォリュームを的確に配することができる。スケールを小さくしたり、分棟形式にする傾向は、真壁智治の『カワイイパラダイムデザイン研究』（平凡社、2009年）においても重視されていた。しかし、なぜ建築というハードなジャンルにカワイイが持ち込まれるのか。それは愛される建築をめざすからだろう。

なるほど、かつてチャールズ・ジェンクスが唱えたポストモダニズムの建築も、モダニズムが大衆に支持されなかったことを踏まえ、使用者と積極的にコミュニケーションをはかるデザインだった。だが、おしゃべりで過剰な造形は、鼻につくようになってしまった。そこでモダニズムの形態言語に戻りながら、人々に受容されやすいデザインが求められた。円というわかりやすく親しみやすいかたち。あるいは、同じキューブがサイズを変えて並ぶと、大小の親子のように見えてかわいい。ポストモダンのときに復活した家型のモチーフも、今度は記号的な扱いではなく、かわいらしさと結びつきながら使われている。例えば、スターパイロッツによる道の駅FARMUS木島平（2015年）は、工場を改修し、農業の六次産業化に貢献する施設だが、複数の小さな家型のヴォリュームを差し込む。柳澤孝彦による上田市交流文化芸術センター・上田市立美術館（2014年）も、大きな円弧の回廊にそって、家型の小さな部屋を並べている。建築の威圧感を減らし、親しみやすくするための操作だ。

個人住宅とはいえ、分棟形式の効果を決定づけたのが、西沢立衛が設計した森山邸（2005年）だろう。大小10個の白い直方体の隙間が、路地のような通り道になる絶妙な距離感をもち、塀がないことで周囲の町並みに溶け込みながら、新しい風景を創造した。これはオーナーの専用住宅と5戸の賃貸住宅から構成される。通常は全体を一つのビルにして、その内部を分けて賃貸にまわす。だが、大きなヴォリームにまとめず、3階建ての棟、屋上も使える大きなワンルーム、あるいは浴室だけの小さな箱など、多様な直方体を散りばめた。しかも窓の位置を工夫し、相互に視線を交わしたり、逆にプライバシーを守るなどの関係性を生む。近年の建替えでは、一部をオーナーの住宅としつつ、残りを賃貸にする事例が増えている。森山邸は、こうした戸建て住宅と集合住宅の中間のような方向性を建築的な形式にうまく翻案したものといえよう。生活の変化にも対応しており、将来、オーナーは賃貸部分の箱も徐々に自分で使う予定らしい。

西田司+中川エリカによる「村、その地図の描き方」（2012年）も公共施設ではないが、敷地に22の小屋を散りばめ、居場所の集合体と呼ぶ。究極的な分散の姿だろう。ともあれ、こうした分棟形式は公共施設でも応用されており、町に開かれた建築をつくるための重要な手法になっている。

いがらし・たろう—1967年パリ（フランス）生まれ。東北大学大学院工学研究科教授。博士（工学）。建築史、建築評論。著書に、『日本建築入門』（ちくま新書、2016）、『忘却しない建築』（春秋社、2015）他。

●七ヶ浜町遠山保育所（2015年）

●七ヶ浜町七ヶ浜中学校（2013年）

●アオーレ長岡（2012年）

●杉並区大宮前体育館（2014年）

●十和田市現代美術館（2008年）

●森山邸（2005年）

ケーススタディ

町に開かれた建築

住宅の間取りを「LDK」で示すように、建築の空間は、用途を規定することで合理的に、機能的につくられてきた。しかし最近、住宅にしろ、公共建築、商業建築にしても、目的が定められていない、フリースペースを取り入れるケースが目立ってきている。しかもそれらの多くは複合型で、分棟方式で、外部に開かれていることも特徴だ。また、できる限り低層にし、建築のボリュームを抑えるといった傾向も見られる。とはいえ都市部では、経済構造上の必然により高層化される場合が多い。それでも一部を低層にするなど、やはり、同じ流れのなかにあることがうかがえる。では、それらの建築が目指すものは何なのか。建築が町に開かれる意味、そこに期待されるものとその成果などについて、いくつかの事例から探る。

みんなの森 ぎふメディアコスモス

行政の中心から町をつなぐ結節点へ

取材・文:**杉山衛**
photo:**坂本政十賜**

所在地――岐阜県岐阜市司町
敷地面積――14,725.39㎡
建築面積――7,530.57㎡
延床面積――15,444.23㎡
構造・階数――鉄筋コンクリート造、鉄骨造、木造（梁）・地上2階、地下1階
設計――伊東豊雄建築設計事務所
建築主――岐阜市
竣工――2015年2月

行政の中心、「つかさのまち」の複合施設

2015年7月、岐阜市の市街地に伊東豊雄氏の設計による複合施設「みんなの森　ぎふメディアコスモス」がオープンした。この場所には、もと岐阜大学の医学部と付属病院があったが、大学の郊外への移転・統合に伴い、約3万1000㎡と、町なかとしてはかなり大きな面積の跡地となった。市はこれに、隣接する県保有地約7000㎡を合わせ、2004年から市民の意見を募集するなど、その有効的な活用を模索してきた。2006年にはコンセプトを「新しい時代の〈つかさのまち〉づくり」と定め、基本的な構想を策定。その第1期の成果として、敷地の北側を使った「みんなの森　ぎふメディアコスモス」が竣工した。

コンセプトにある「つかさのまち」とは、敷地のある町名が「司町（つかさまち）」であり、1874（明治7）年に岐阜県庁舎が設置されたのを皮切りに、近隣に市役所、警察署、裁判所、市民会館、市立図書館などの公共施設が集積した、市政を司ってきた場所であることに由来する。「みんなの森　ぎふメディアコスモス」の東隣には、今も1924（大正13）年に建てられた旧岐阜県庁舎の一部が残され、耐震補修を経て保存されることが決定している。しかし他の公共施設の多くも老朽化し、耐震性や一部アスベストを使用しているという問題もあったため、長らく建替えが望まれてきた。また市民からは、手狭なうえに老朽化し、エレベーターなどもない市立図書館を刷新してほしいという希望が多く、まずはそうした市民の希望である図書館を最優先に実現するかたちで、このプロジェクトはスタートしている。

●ぎふメディアコスモス事業課の畑上竜也さん

「とはいえ、これだけの敷地を図書館だけに使うのはもったいない。岐阜は全国的に見ても市民活動が盛んな地域ですから、そうした活動が交流できるような場もほしい。図書館と市民活動の拠点、この二つを柱とする複合施設として構想されたのが〈みんなの森　ぎふメディアコスモス〉です」と、ぎふメディアコスモス事業課の畑上竜也さん。

プロジェクトは「つかさのまち夢プロジェクト」と名付けられ、続く第2期には2021年の運用開始をめざして、「みんなの森　ぎふメディアコスモス」の南隣に地上18階の新市庁舎を建設、第3期には、移転する現市庁舎の跡地の有効活用などが検討されていく予定だ。

視線を遮らない、交流のための図書館

「みんなの森　ぎふメディアコスモス」は、戦国時代の覇者・織田信長が天下統一の足がかりとした岐阜城を山頂にいただく、標高329mの金華山の近くに位置している。その山並みに呼応するような緩やかな起伏をもつ屋根と、細い木材のサッシが格子状に組まれた外観は特徴的だが、全体的には「四角くて平たい」建物という印象だ。それもそのはずで、高さ約16m、2階建ての低層建築ながら、東西90m、南北80mと、約7000㎡に及ぶほぼ正方形の床面積をもっている。その1階には、東側にホールやギャラリーからなる「文化の拠点（ドキドキエリア）」、西側に交流談話スペース、市民活動を支援するセンターの窓口がある「絆の拠点（ワイワイエリア）」が置かれ、2階は「知の拠点（フムフムエリア）」として、フロア全体が図書館（岐阜市立中央図書館）にあてられている。

●「みんなの森　ぎふメディアコスモス」南側ファサード。正面玄関前は「カオカオ」広場。館の右手の白い建物は旧岐阜県庁、その向こうには岐阜城をいただく金華山を望む

2階図書館へは、南側のメインエントランスからエスカレーターを上がる（もちろん階段もエレベーターも併設されている）。次第に見えてくる図書館の全貌には、誰しも最初、はっと息を呑むに違いない。そこには、壁のないワンフロアが広がっている。しかも天井は、地元産の東濃ヒノキ材を白木のまま使った格子状の構造がうねるような曲面を描き、その窪みに合わせるように、照明が仕込まれた大きなポリエステル製の傘が吊り下げられている。天井の窪みからはヒノキ材の格子を通して外光が採り入れられ、昼は傘全体を照らし出すと共に、傘がつくる円形の内部空間に柔らかい光を落としている。

「グローブ」と呼ばれるこの傘は、大小合わせて11あり、入り口にかかる巨大な「エントランスグローブ」を始め、総合カウンターのあるグローブ、レファレンスカウンターのあるグローブ、展示のグローブなど、図書館としての機能を示している他、大きな円形のソファが設えられた「ゆったりグローブ」、背の低いイスと机が置かれた「児童のグローブ」、あるいは周辺に郷土資料を配置した「郷土のグローブ」、青少年向けの図書が集まった「ヤングアダルトのグローブ」といった性格付けがなされている。

「市立中央図書館」は、空間としてはワンスパンではあるけれど、モンゴルの移動式住居「ゲル」を思わせるようなグローブによって緩やかに区切られ、それぞれに個性のある小さな空間が集まった、それ自体が町のような構造になっている。

「グローブの下には図書館機能や居心地のいい空間がありますから、本を手に取ったらまずグローブに行く。ただ広いだけでは迷ってしまいますが、グローブがあることでその場所の特徴もはっきりとわかり、来館者のいい指標となっているようです」と、図書館事業係主事の増田知美さんは言う。

書架はそれぞれのグローブを中心に、まるで星雲のように緩やかなカーブを描く放射状に配置されている。高

●岐阜市立中央図書館事業係主事の
増田知美さん

さが1m程度に抑えられ、視線を遮らない。設計者の伊東氏が、着工に先立つ2012年11月に開催された岐阜市主催のシンポジウムで、来館者が「あっ、あの人がいた」と出会い、交流できるような図書館を実現したいと語ったように、閉鎖的で静粛な従来の図書館像とは異なる、明るく開放的な図書館空間となっている。

境界を超えて流れが重なる場所

各グローブの下にはさまざまな色のカーペットが敷かれ、円形のスペースがかたちづくられているが、なかでもユニークなのは「親子のグローブ」だろう。緑のカーペットにはわざわざ起伏がつくられ、自然の岩を模したようなベンチが三つ配されている。直径3mほどの小さな円だが靴を脱いで上がるようになっており、子ども連れのお母さんたちが思い思いの仕方でくつろいでいる。親子の自然な会話も耳に届く。週末や祝日には、ここで「お話し会」も行われているのだという。

「広いフロアですから、子どもの声が気になる方は、声の届かないグローブでくつろいでいただけると思います。開館時には館長が〈子どもの声は未来の声〉という理念を表明して、利用者には、子どもたちのざわめきに寛大であることをお願いしています。もちろん子どもやお母さんたちには公共の場であることを意識してもらい、お互いが歩み寄りつつ利用できる場をめざしています」と、増田さんは運営の方針を語る。

人々の交流の舞台は、もちろん図書館だけではない。取材時にはちょうど、文化の拠点にある「みんなのホール」で食生活に関する集会が開かれていた。最大席数230と、市民活動には使い勝手のいいサイズのホールだ。会が終わり退出してくる人々は、放課後の学生たちが集まる絆の拠点の談話スペースを通り抜けたり、2階の図書館へも立ち寄っていく。この日は準備中だったが、ギャラリーが開いていれば、興味をもつ人もいるだろう。そこにすぐさま交流が生まれるわけではないが、本来異質で、出会う機会がない者同士が、ここでは自然に集う場所となっていることが感じられる。

「みんなの森　ぎふメディアコスモス」の1階には、東西南北に四つのエントランスが設けられ、さまざまな動線が生み出されるように工夫されている。もちろん通り抜けるだけでもいい。そこに生まれる多様な人の流れは相互に重なりあい、出会いの機会を増幅させていくに違いない。

なお、館の冷暖房には、市内を流れる長良川の豊富な伏流水を利用した床輻射式が採用されている。先のシンポジウムで伊東氏が、「暖気・冷気は、壁のほとんどない広い内部をゆっくり循環して、最後にグローブのなかに入ります。夏はこのグローブの頂部から排気され、冬はグローブ内を暖気が循環します」と表現した空気の流れが、グローブの下の空間をより快適なものにしている。この床輻射式の冷暖房は1階にも備えられ、さらに、全国的に見ても日照に恵まれた地域の特性を活かした太陽光の利用も積極的に行うことで、他の同規模の建築と比べて、消費エネルギー50%削減を目指しているという。ここではエネルギーも、内と外の境界を越えて流れているようだ。

町全体を「文化の森」に

「みんなの森　ぎふメディアコスモス」は、伊東氏の建築の特徴ともいえる、内と外の空間をつなぐ仕掛けに満ちている。グローブがつくる円形のパターンを用いながら、2階の図書館には、金華山を望む東側に半円を大きく張り出した「金華山テラス」や、南に面した「ひだまりテラス」といった、外部に大きく開かれた空間が設けられている。

また1階のメインエントランスの右手には、開閉できる窓をはさんで内と外をまたぐ円形のイベントスペース「ドキドキテラス」がつくられ、取材時には、市内の学生による作品が展示されていた。その反対側、メインエントランス左手には、円形に張り出した

●グローブを中心に、背の低い書架が
緩やかなアールを描いて配されている

●グローブは、図書館機能をもつスペースと閲覧スペースを示している。これは周囲に文庫の書架を集めた「文庫のグローブ」

●子ども連れでも気兼ねなくくつろぐことができる
「親子のグローブ」

小建築に、帽子のような屋根が乗せられた喫茶スペースもある。さらにこのメインエントランスは、イベントなどが行える「みんなの広場　カオカオ」へとつながっている。

2階の図書館には、閲覧室に差し込む西日を和らげる効果も考えて、縁側のような「並木テラス」がつくられている。ここから見下ろす館の西側には、館の冷暖房に利用した伏流水を使った人工の小川に沿って樹木が植えられた「せせらぎの並木　テニテオ」があり、読書にうってつけな、ゆったりとした木製のベンチが配されている。「テニテオ」に面した1階の縁側にはイスとテーブルがつくり付けられ、学校帰りの学生たちが談笑する姿も見られる。

「カオカオ」、「テニテオ」とはちょっと奇妙な名称だが、館の名称と同様、全国公募によるものだという。そこには、手に手をとって並木を歩き、広場では顔と顔を合わせたいという、「みんなの森　ぎふメディアコスモス」に寄せる市民の思いが端的に示されている。

「設計にあたって初めて岐阜を訪れた伊東さんは、まず金華山に登って市内を一望されたのですが、町なかは東京よりも緑が少ないことに驚かれ、建築もそこに溶け込むような緑の空間をつくりたい、と語っていらっしゃいました」と畑上さん。

240mにわたる「テニテオ」の並木には、日本原産の落葉高木であるカツラが4列に植えられ、せせらぎには多様な生物が住み暮らせるような植生の

●2階をワンフロアとして使った図書館。印象的なヒノキ張りの屋根に「グローブ」と名付けられた大きな傘が吊られている。手前は「展示グローブ」、奥はレファレンスカウンターのある「レファレンスグローブ」。傘を飾る模様は、市民とのワークショップから選ばれた

●グローブの下には、明るい外光に満ちた快適な空間が広がる（「児童のグローブ」）

●せせらぎのある「テニテオ」の並木がつくる木陰は読書にも最適だ

工夫も凝らされている。こうした「みんなの森　ぎふメディアコスモス」の緑は、金華山の「自然の森（深い森）」に対して、地域の環境にふさわしいかたちで人々がつくり育てていく「文化の森（明るい森）」と位置づけられている。ここからJR岐阜駅へと至るまっすぐな道を「緑の軸」、金華山の山すそを経て長良川河畔を回遊する道を「長良川生態回廊」と名付け、町全体を緑あふれる「文化の森」として再生していこうという機運が生まれ始めている。

地域振興の結節点として

第2期につくられる新市庁舎はすでに基本設計を終え、ガラス面と白い壁面が幾重にも重ねられた近代的な外観イメージや、詳細な建築計画が公開されている。この設計はプロポーザルによって選出された設計事務所によるものだが、「設計プロポーザルでは、〈みんなの森　ぎふメディアコスモス〉との調和に配慮しつつ設計に取り組むことが重視されました」と畑上さんは言う。そのためか「カオカオ」に面した新市庁舎の低層階には、市民交流スペースや、緩やかなカーブに樹木を配した、ゆったりとしたテラスなど、「みんなの森　ぎふメディアコスモス」とのつながりを重視した計画がなされている。二つの建物をつなぐ「カオカオ」は、今後はさまざまなイベントを始め、災害時には避難や防災の拠点になるなど、多様な役割を担っていくことになるだろう。

「みんなの森　ぎふメディアコスモス」では、7月の開館1周年を前に、来館者数は年間目標の100万人を超えた。今後市庁舎が完成すれば、「つかさのまち」全体の人の流れは、いっそう大きくなるに違いない。「岐阜駅周辺や〈みんなの森　ぎふメディアコスモス〉の賑わいを、市内最大の繁華街〈柳ケ瀬〉へ波及させるべく、誰もが安全、安心、快適に回遊できる環境づくりを推進しています」と畑上さん。

市内には、駅からバスで5分ほどの場所に、美川憲一の「柳ケ瀬ブルース」でも有名な大きな繁華街がある。柳ケ瀬からさらにバスで15分ほどの金華山のふもとには、市民の憩いの場としての岐阜公園があり、山頂の岐阜城へのロープウェイが発着する観光地ともなっている。その近くを流れる長良川では観光として鵜飼が行われ、ホテルも数軒建ち並んでいる。とはいえ柳ケ瀬は、他の地方都市の繁華街と同じように深刻なシャッター街化が進み、長良川の鵜飼観光も、往時の賑わいを失って久しいのが現状だ。

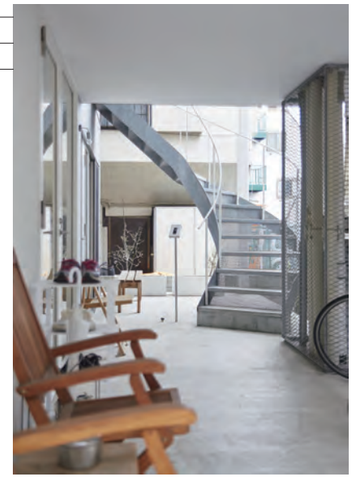
大学の移転・統合による跡地という、「土地ありき」でスタートしたプロジェクトではあるが、この「つかさのまち」は、ちょうど柳ケ瀬と岐阜公園の中間点に位置している。これを活かして町の流れをつくれば、図書館や市庁舎に集まる市民の足が繁華街や憩いの場へと周回するきっかけともなり、観光客の移動の利便性も増すのではないだろうか。建築面でも運営面でも「交流」を第一に掲げる「みんなの森　ぎふメディアコスモス」は、その結節点としての役割を十分に果たしてくれるに違いない。

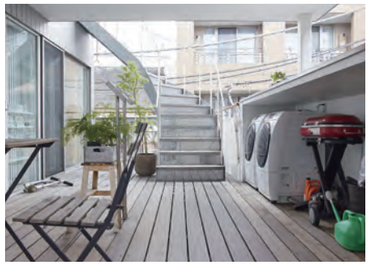
●山並みに向かって大きく円形に張り出した「金華山テラス」

食堂付きアパート
「小さな経済」を地域に循環させる

取材・文:斎藤夕子
photo:新井卓

所在地——東京都目黒区
敷地面積——139.89㎡
建築面積——97.56㎡
延床面積——261.13㎡
構造・階数——鉄骨造、一部鉄筋コンクリート造・地上3階、地下1階
設計——仲建築設計スタジオ
建築主——個人
竣工——2014年3月





●1階から3階までつながる「立体路地」と位置づけられた共有廊下。見晴らしの良い3階では入居者同士でバーベキューを行うこともあるそうだ

「中間領域」としてのアパート

東急目黒線の武蔵小山駅。品川区と目黒区の区界に位置する「都会」ながら、日本一長いアーケード商店街として知られるパルム商店街の入り口として、どこか庶民的な雰囲気を漂わせる。しかし2006年に駅が地下化されて以降、その雰囲気も刻々と変わりつつある。現在は、東京都による「東京のしゃれた街並みづくり推進条例」に基づき、駅からパルム商店街にかかる一帯の再開発が進行中で、数年後には40階建て程度のタワーマンションが3棟出現する予定だ。またこれに伴い、駅をまたいで国道1号線から目黒通りをつなぐ補助第26号、これに交差する補助第46号線など周辺道路の拡幅も計画されており、今後、大幅に町並みが変わっていくことが予想される。

そんな武蔵小山駅から目黒方面に徒歩約4分、補助第26号線から一本入った閑静な住宅街に「stairs（ステアズ）」という賃貸集合住宅が2014年3月に竣工した。ステアズとは「階段」で、確かにこの建物の特徴をよく表わしているが、設計した仲建築設計スタジオのプロジェクト名は「食堂付きアパート」。これもまた、この建物の特徴や個性をよく表わした名称である。

建物全体が螺旋を描くように、外階段で地下1階から地上3階までがつながるこの集合住宅は、「食堂付き」と称する通り、1階はカフェになっている。地階には机貸しのシェアオフィス（6席）。住戸は1～3階までに5戸あり、それらは「スタジオ」と名付けられた仕事場のあるSOHOユニットとなっている。つまりここは、多様な用途をもつ複合型の「アパート」だ。

「食堂とシェアオフィス、SOHOユニットの共通テーマは〈小さな経済〉。職住一体、あるいは職住近接の開かれた生活環境です。また、SOHOはプライベートと仕事の、食堂やシェアオフィスはアパートと社会との中間領

●2面が通りに面した角地に建つ「食堂付きアパート」

●2階のSOHOユニット。奥の間仕切りを閉めてしまえば、オフィシャルな打ち合わせにも対応できそうだ

●玄関前テラスと共有廊下を緩やかに仕切るインターフォン

域。それぞれ用途を複合させつつ、境界を緩めることで、人と人、人と町の関係性をつくっていく。いわばその境界を空間化しているのが、この〈食堂付きアパート〉です」

設計者の仲俊治さんは、この集合住宅の特徴をそう教えてくれる。

「空間」を身体性に落とし込む

1階カフェの前面は、2階住戸が大きく張り出した軒下のような屋根付きテラスになっている。建物の北と東の2面が通りに接する角地であるだけに、とてもオープンな雰囲気だ。テラスの奥には住戸につながる半階分の外階段があり、これが駅方向から歩いてくるとちょうどアイストップの役割を果たし、テラスにはたまり場のような雰囲気が生じている。

外階段を上がると、カフェの奥に1階の住戸。その奥に2階への階段がつづく。各住戸とも玄関前にテラスが広くとられているが、空間的には共用廊下と一体化しており、その境界を示すのはフロアから唐突に立ち上がる細いポール状のインターフォンのみ。ただ、玄関から離れた位置にインターフォンがあることで、玄関までの間はプライベートな領域であると感じ取ることができる。

玄関ドア脇には、ガラス壁越しに飾り棚が設けられており、各居住者が、自身の仕事や趣味を外に向かってアピールできるショーウィンドウのようになっている。そして「スタジオ」と呼ばれる室内はほとんど間仕切りのないワンルーム（広さはそれぞれ異なり、1階住戸のみメゾネットタイプ）。概念としては、玄関前テラスから部屋の奥に進むにしたがってオフィシャルからプライベートの要素が濃くなっていくイメージで、手前は用途の定められていない広い空間とすっきりしたキッチン、奥に向かってトイレや浴室が配置され、一番奥、ほとんど唯一の建具の向こう側が寝室として設定されている。

なお、共用廊下と玄関前テラスのつながりは「立体路地」と位置づけられている。いわば、玄関前テラスは縁側で、そこを行き交う人同士が自然に挨拶を交わすような、ご近所付き合いのスペースといったイメージだ。

「意識したのは街路からの連続性です。街路に面したテラスから1、2、3階と、箱をズラしながら積み重ねるような構造として、接地性を維持しながら立体的に展開しています。接地性を確保することにより、部屋の内外の境界が緩くなり、共用廊下で花を育てる、日曜大工をするなど、路地のような使い方がしやすくなることを意図しました。そして実際に、そのように使われています」（仲さん）

住まい手の感覚としては、各住戸は独立しているものの、立体路地を互いに共有しながら一体感をもって暮らすという点でシェアハウスに近いような気もする。実際、入居者にはシェアハウスで暮らした経験をもつ人が多いそうだ。

「ただ、共有スペースは特別多くはありません。通常は部屋の奥についているベランダを玄関前テラスというかたちで前面にもってきて、共用廊下との境界を緩めているだけ。基本的にはほとんどの場所が誰かに属しているんです。とはいえ、普通はオーナーや管理会社の管理が行き届かないと共用部分をうまく使っていくことは難しい。そこを、境界のつくり方次第で入居者同士がとくに負担を感じずに、うまく使っていく方法があるのではないか。そう考えていくなかで、職住一体の住まい方に可能性があると思ったんです」（仲さん）

●玄関脇に設置された、ショーウィンドウのような飾り棚

●仲建築設計スタジオ代表の仲俊治さん

たとえば掃除だ。1階のテラスはカフェのテラス席でもあるため管理はカフェで行う。また、カフェとシェアオフィスはトイレを共用しているため、トイレの掃除もカフェが担っているという。各住戸の玄関前テラスの掃除はもちろん入居者ごとに行うが、SOHOとして仕事をしていればなおさら、打ち合わせのためにクライアントが訪ねてくることもあるだろう。周辺環境をきれいに整えておくことは、いわば、仕事の一環でもある。おかげで掃除も嫌々するのではなく、仕事とプライベートをあわせたライフスタイルのなかに自然と組み込まれることになるのだ。

「インターフォンもそうですが、最終的には身体性に落とし込まなければ空間の使われ方は変らない。その空間で人がどのように感じ、どう振る舞うのかということを、常に考えたいと思っています」（仲さん）

再開発の町の交流空間として

「食堂付きアパート」が建つ前、ここは一般的な賃貸アパートだった。駅にも近い好立地であるため入居者も絶えず、「私自身は、別にそのままでもいいと思って、あまり関心をもっていなかったんです」と言うのは、オーナーの椛沢（かばさわ）誠治さんだ。

ただ目黒区では、木造住宅が密集している区内いくつかの地域を「不燃化推進特定整備地区」に指定しており、食堂付きアパートのある目黒本町五丁目は全域がその指定地区となっている。さらにこの場所は拡幅計画のある補助第46号線の沿道30mの内側に位置するため、道路整備と一体となった「都市防災不燃化促進事業」のエリアにも指定された。この事業が2010年にスタートし、拡幅にかかる住居や店舗の立ち退きや建替えが目立つようになってきたのだ。

「再開発されると、町がつまらなくなるという方もいます。ですが、せっかく再開発をするのに昔より町がつまらなくなってしまったのでは本末転倒。そのなかで、どうせアパートも建替えなければならないなら、町が少しでも楽しくなって、入居者にもこの町に暮らしていることに楽しさを感じてもらえるような建物にしたかったんです」（椛沢さん）

上●1階のカフェ「Peek-a-boo」。10坪程度のスペースながら天井が高く、また、ちょうどシェアオフィスの天井にあたる部分が半階分高くなった小上がりのようになっていることで、空間に広がりが感じられる
右●初代のシェフ時代、テラスを使って開催していたイベント。地域のたまり場のように利用されている（photo提供:仲建築設計スタジオ）

●地階のシェアオフィス。利用者6名分の机の他、打ち合わせスペースも設けられている。また一角には、テーラーを営む人が利用する更衣室も設置されていた

そこで椛沢さんが相談をもちかけたのが、地元の学校で同級生だった建築家の宇野悠里さんだった。宇野さんは仲さんのパートナーとして共に仲建築設計スタジオを営む。「ですから最初は、仲さんがとくに、建築と地域のかかわりについて研究されている方だとは知りませんでした」と椛沢さん。

仲さんは、東京大学大学院工学系研究科修了後、2009年に独立するまで建築家の山本理顕氏が主宰する山本理顕設計工場でキャリアを積んできた。その山本氏は、一つの住宅に一家族が住み、家族内だけで完結しようとする日本の運営システムは破綻しているとして「地域社会圏」という問題を提起しており、仲さんもこの研究に携わってきたのだ。

「そのなかで一つ見えてきたのは、〈働く〉と〈住む〉が一緒になることの可能性です。働くことにはお金を稼ぐ以外の要素もあって、それが地域や社会、他者とのつながりだと思うんです」(仲さん)

椛沢さんは「再開発が進むと、新しい住民も増えてきます。そこでここを、地域の新旧住民が交流できるような場所にしたいと思いました。とくに単身者向けのアパートだと周りに誰も知り合いがいない、誰とも挨拶を交わさないということがよくある。すると、どこの町に住んでも変らない、町に無視されているような気持ちになってくるのではないでしょうか。それが町に知り合いができれば、この町に所属しているというアイデンティティも育つと思うんです」と語る。そんな言葉に、地域への貢献を志すオーナーと人と町とのつながりを探究する建築家の幸運な出会いがあったことがわかる。

ハードと共にソフトをデザインする「食堂会議」

地域に開くという意味で、最大のポイントになっているのはやはり「食堂」の存在だ。じつは、1階のカフェは現在2代目でテナントとして入居しているのだが、竣工から約1年は椛沢さんがオーナーを務め、独立を志す女性シェフが料理を提供するレストランだった。

「シェフだった女性は、勤めていたワインバーを辞めて独立しようとしていたところをスカウトしてきたので、短期間ということは最初からあったんです」と椛沢さん。このことから、ある意味、実験的なスペースであることを前提としており、約10坪という小さな規模にすることも予め考慮されていたという。

だが、空間をつくっただけでは地域との交流にまでつながらないのが現実だろう。そこで仲さんと椛沢さん、初代シェフの3者はレストランのメニューからイベントの企画、空間利用の方法などを協議する組織として「食堂会議」を結成。互いに連携しながら運営を行ってきた。

「地域交流を一番よく表わしているのはテラスの活用です。ここでは毎月1回、シェフが料理に使っている有機野菜を販売するマルシェを開いたり、チャレンジショップというのか、店舗をもたずにパンの製造・販売をしている人がお店を出したり、花を売ったりという、イベントのようなことをやってきました」(仲さん)

ここでの出店者は、主にシェフとつながりのある事業者で、出店に際しては、売り上げの15%をオーナーに支払うという場所貸し方式をとった。一方、仲さんは空間利用に対するアドバイスやそのための設備を整えるといった役割も担う。それにしても、通常は建築家が自分が建てたアパートの運営に携わることはまずない。オーナーにしても、基本的には管理会社に任せきりになっているのが普通だろう。それがここでは継続的にかかわり、ハードだけではなく、ソフトの部分に関しても、建築のテーマである「小さな経済」をつくりだしていく仕組みをデザインしているのだ。

「イベントをやると、近隣の方がけっこう見に来てくれて、地域への刺激にもなったと思います。今はいったん休んでいますが、新しいカフェも軌道に乗ってきたようなので、また始めたいと思っています」と椛沢さん。実際、新たなカフェはケーキをテイクアウトできる業態であるため、レストラン当時よりも単価は安いが人の出入りは多く、比較的スムーズに地域と馴染んできているようだ。

インキュベーション・アパートの可能性

また「食堂付きアパート」にはもう一つ特徴がある。それはインキュベーション施設としての機能だ。初代シェフが独立というかたちで巣立っていったのもその一環だが、そもそも住戸を職住一体のSOHOユニットとしたり、地階にシェアオフィスを設けたりしたことが、その姿勢を裏付けている。つまり、建物全体がインキュベート施設のようなのだ。じつは「ステアズ」というアパート名には、「ステップアップしていく」という裏の意味も込められている。

シェアオフィスは6席からなり、現在、カフェの事務所として1席、フリーランスのデザイナー、ライター、翻訳家、建築家にテーラーを営む人と、職種もバラバラな6名が利用しているが、基本的には、独立して自ら事務所を構えるまでのステップアップの場としての利用が多いようだ。訪ねた日には、建築家の丸島潤さんが仕事をしていたが、「今年独立したばかりで、事務所を構えるところまで手が回っていないのですが、家では仕事に集中しづらい。ここではコピー機をシェアできたり、クライアントやメーカーの方と打ち合わせもできるので、非常に助かっています」と、シェアオフィスを利用するメリットを教えてくれた。

●取材時には、ちょうど空室になっていた1階のメゾネットタイプの住戸。新たな入居者もSOHOとして利用する予定だという

しかしインキュベート施設だとすれば、ここで成長した入居者はどんどん巣だっていくことになる。入居者が定着しないことは、賃貸アパートとしてはデメリットではないだろうか。取材時、SOHOユニットを職住一体の場として使っている入居者は5戸中3戸だったが、たとえば仕事の規模が拡大すれば、SOHOでは手狭になる可能性もある。もちろん賃貸アパートである以上、短期間での入退去は織り込み済みだろうが、それを加速しかねないのではないだろうか。

椛沢さんは「大家としては、退去するというのはやはりバッドニュースです。ですが独立する、仕事を拡大するということであれば応援したい。痛し痒しです」と苦笑する。ただ、SOHOユニットであることや、カフェやシェアオフィスとの複合型であるという独自性は「賃貸アパートとしては強み」だともいう。一般的なアパートをつくっても、駅からの距離、築年数や家賃だけで判断され、たくさんの情報のなかに埋没してしまうからだ。「ですがここの場合は、〈この空間でなければ、自分のやりたいことが成立しない〉とおっしゃる方もいます」と椛沢さん。実際、訪ねた日には1階のメゾネットタイプが空室になっていたが、募集からすぐに次の入居者が決まり、他に問い合わせが来た何人もの希望者を断らなければならなかったそうだ。独自性のあるアパートではあっても、それが十分に、住まい手のニーズに応えているということだろう。

●オーナーの椛沢誠治さん

「SOHOというと新しい感じがしますが、じつは住居兼仕事場として、奥に行くにしたがい、だんだんとオフィシャルからプライベートへグラデーションしていくような住空間は日本には数百年前からある。つまり町屋がそうなんです。その源流は平安時代末まで遡るという定説もあり、都市居住のあり方としては普遍的で、理にかなったスタイルなんだと思います」(仲さん)

「食堂付き」であることは、地域に開かれた「小さな経済」をテーマにしたこの建築の最大の特徴だが、仲さんも椛沢さんも、今後ずっと「食堂」であり続ける必要はなく、地域のニーズに応じて変わっていってもいいという。また仲さんは、このアパートを町屋にたとえたが、不易流行という言葉があるように、伝統的なものは、革新されてこそ継続していくものだろう。地域と交わりながらその変化を常に身近に感じていくこと。インキュベーション施設として常に代謝を受け入れていくこと。そうしながらも「食堂付きアパート」がこの場所にあり続けるということが、再開発によって大きく変わろうとしているこのエリアに、常に新鮮で普遍的な魅力を与え続けていくに違いない。

鶴ヶ島太陽光発電所環境教育施設「eコラボつるがしま」

工場跡地を環境・防災・地域の拠点に

取材・文:田井中麻都佳

所在地――埼玉県鶴ヶ島市
敷地面積――499.00㎡
建築面積――127.82㎡
延床面積――127.82㎡
構造・階数――木造・地上1階
設計（意匠）――東洋大学ソーシャルデザインスタジオ＋藤村龍至建築設計事務所
建築主――養命酒造株式会社、鶴ヶ島市
竣工――2014年2月

埼玉県鶴ヶ島市鶴ヶ丘地区の一画、鶴ヶ島太陽光発電所に隣接する「eコラボつるがしま」は、環境教育、防災拠点、地域活性化を目的に、鶴ヶ島市と東洋大学、NPO法人鶴ヶ島第二小学校区地域支え合い協議会、養命酒造株式会社の四者のコラボレーションにより、2014年3月に誕生した環境教育施設である。高さ7mほどの切妻屋根がシンボリックなホール棟とトイレ棟、管理棟の三つの平家の分棟と、パーゴラを備える中庭からなる、120㎡ほどのこじんまりした建物だ。しかし、その一見簡素にも見える外観からは想像もできないほど、施設の成り立ちが興味深い。

かつてこの土地は、1961年から2006年まで稼働していた養命酒造株式会社の工場跡地だった。その8万6000㎡にも及ぶ広大な跡地利用の検討を重ねるなかで、まず敷地の半分を太陽光発電所として活用することが決まった。しかしこれまで、国内で住宅地にメガソーラを建設した事例はほとんどない。そこで、単に発電所をつくるのではなく、地域に貢献できる施設をつくりたい、という要望を同社が市に伝えたことから工場跡地利用の検討がスタートしたという。話し合いを重ねるなかで、太陽光発電所に隣接して、地域の小学校の環境教育に役立つと共に、災害時に住民が活用できる防災拠点、地域活性化の拠点という三つの役割を担う施設の建設を、産官学民の協働で進めることになった。

●鶴ヶ島太陽光発電所環境教育施設「eコラボつるがしま」の外観。向かって右手から管理棟、ホール棟、トイレ棟で構成されている（photo: Takumi OTA）

●藤村龍至さん（photo:斎藤夕子）

その際、設計計画に携わることになったのが、川越にキャンパスを構え、鶴ヶ島市と包括的な連携協定を結ぶ東洋大学である。その連携は、数年前からすでに始まっていた。2012年、大学の演習としてスタートした「鶴ヶ島プロジェクト2012」に話はさかのぼる。

産官学民が連携する「鶴ヶ島プロジェクト」

「鶴ヶ島プロジェクト」とは、東洋大学建築学科のカリキュラムとして、鶴ヶ島市の協力のもと、今後、高齢化が進むことを踏まえ、公共施設の将来的な再配置に備えた計画を立てることを課題とした演習である。すなわち、公共施設の老朽化と住民の高齢化という地域の課題に対し建築の分野からいかにアプローチできるかを考えようというものだ。

●環境教育施設の内部。椅子や展示台として使える階段状の床面と、県産材を使った天井のトラスが印象的だ（photo: Takumi OTA）

発足の経緯について、「鶴ヶ島プロジェクト」で主導的な役割を果たし、その後「eコラボつるがしま」の実施設計を担った東洋大学理工学部建築学科専任講師の藤村龍至さん（兼・東京藝術大学美術学部建築科准教授、株式会社RFA主宰）は、次のように語る。

「今や人口減少に伴う自治体の財政逼迫は全国的な課題です。ただ、鶴ヶ島市の場合は1980年代から人口が急増し、2013年に7万人に達して以降はほぼ横ばいで、一見するとそれほど危機感を抱くような状況ではありません。しかしより深刻なのは高齢化の方で、すでに市の財源のうち〈扶助費〉と呼ばれる高齢者福祉などのサービス予算がますます膨らむ一方、道路や学校などのインフラや公共施設の建設費を賄う〈普通建設事業費〉はさらなる減額を余儀なくされている。そうした逼迫した状況を、大学の課題として可視化し、いかに持続可能な郊外都市像を描けるかがこのプロジェクトの狙いでした」

じつは、藤村さんが東洋大学の専任講師として就任したばかりの2010年頃、ツイッターを通じて鶴ヶ島の藤縄善朗市長との知己を得た。そこで藤村さんは、藤縄市長に、建築学科の設計演習の課題として、鶴ヶ島市の実際の施設を題材にしたい、ついては市長から課題を出してもらえないかと打診した。すると藤縄市長もこれを快諾。そして翌年、せっかくなら市民にも広く参加してもらうワークショップ形式で、プロジェクトを展開しようということになった。この取り組みに対し「鶴ヶ島プロジェクト2012」という名称が与えられ、活動がスタートしたのだ。

来場者投票で考える、これからの公共建築のあり方

設定された課題は、将来、児童生徒数が減ることを前提に、学校と公民館の機能をあわせもつ新しいタイプの公共建築について、面積としては従来の7割程度という、縮小型の構想を念頭に立案して欲しいというものだった。もちろん、あくまで大学のカリキュラムであり、これによって実際に小学校をすぐに建てようというわけではない。いわば将来に備えた予行演習のようなものだ。

ここで藤村さんは、ユニークな手法を取り入れた。スイスのバーゼル地方で実際に行われている公共建築の選定を住民投票で決めるという手法をモデルに、来場者による投票とワークショップを組み合わせたパブリック・ミーティングを行ったのだ。

具体的には、まず選ばれた学生チーム9組が、模型と図面によるプレゼンテーションを行い、プレゼンを見た来場者（地域住民、自治体職員、大学職員など）が、好ましいと思ったプランに対して投票する。そこでまずは上位4案に絞り、さらに投票を行い1案に絞る。これが1回、約2時間で行われるが、それで終わりではない。ここでポイントとなるのは、投票用紙に設けられた自由記入欄に、そのプランを評価した理由やプランに対する印象などを自由に書いてもらったことだ。さらに、それらの意見をもとに、なぜ、最後に残った案が評価されたのか、あるいは、他の案にも評価するべきところがあったのではないか、といったことを、設計チームで話し合う。そうして、それらの意見をもとに、再度、設計チーム全員が、2～3週間後に開催されるパブリック・ミーティングに向けて新たなプランをつくりあげる。これを5回繰り返した。

「回を重ねるうちに、提案する側、投票する側がお互いに、建築として、本当に必要な機能やデザインがどういうものなのか、徐々に理解を深めるようになりました。またそうやって何度も対話を繰り返していくなかで、どういう建物を核として、これからのまちづくりを考えていけばいいのか、行政、市民、学生の間に共通の認識も生じてきました」（藤村さん）

ところで、この鶴ヶ島プロジェクトは、大学の演習としては面白い取り組みだが、あくまでも授業の一環であり、

●南側からホール棟の大屋根を眺める（photo:斎藤夕子）

●環境教育現場の様子。太陽光発電による電気自動車の充電設備の説明を受ける小学生たち（photo提供:RFA）

バーチャルな公共建築だったからこそ、市民に縮小型プランが受け入れられたようにも思う。従来、公共建築といえば、いかに立派な建築をつくり町のシンボル的な存在にするか、もしくは、手狭になったから規模を拡大しようといった流れで考えられてきた。そうした公共建築の在り方に慣れ親しんできた住民にとっては、現実の公共建築について、縮小型のプランをいきなり行政から突きつけられたとしたら、すんなり受け入れることはできなかったかもしれない。「縮小＝衰退」というイメージは根強く、市民が不安や拒否感を抱いても不思議ではない。バーチャルだからこそ、自由で活発な対話を可能にし、鶴ヶ島に必要な公共建築の姿を浮き彫りにできたといえるだろう。

なお、このパブリック・ミーティングで最終的に一番票を集めた学生は、大学を卒業後、実際に鶴ヶ島の公共建築の課題を解決したいという志を携えて、現在、鶴ヶ島市の職員となり都市計画課で働いているという。

鶴ヶ島プロジェクト方式をeコラボつるがしまで実践

鶴ヶ島太陽光発電所環境教育施設「eコラボつるがしま」建設の話がもち上がったのは、その直後の2013年のことである。藤縄市長から、東洋大学に依頼して鶴ヶ島プロジェクト2012の方式で環境教育施設の設計をしてもらえないかという相談があったのだ。ちょうど、鶴ヶ島プロジェクトを経験した東洋大学の学生の多くが大学院に進んだタイミングだったこともあり、いよいよ実際の建築物の設計に大学院生10名で臨むことになった。

やり方は鶴ヶ島プロジェクト2012の方式を踏まえて、提案した10案で来場者投票を行い、参加者の意見を聞いて修正を行い、さらに投票を実施して、それぞれ評価された要素を入れ込みつつ再提案をするというプロセスをとった。たとえば、第1回のパブリック・ミーティングで2階建て案は共に0票となり平家の案が選ばれたこと、第2回のパブック・ミーティングでは、太陽光パネルと建物の軸を揃える案、ベンチや半外部空間をもつ案などに票が集まったことなどを踏まえて、学生たちは新たなプランを提案していったのである。

なお投票は、養命酒造、自治体職員、鶴ヶ島第二小学校区地域支え合い協議会のメンバー、地域住民、東洋大学のメンバーのほか、外部からの参加者を含む来場者で行った。関係者投票ではなく、あくまでもオープンな議論としたところも画期的だろう。多い時は50名ほどが集まり、投票と対話を重ねることになったという。

しかし、問題もあった。この時点では、環境教育施設兼、防災、地域活性化に役立てる施設をつくるという大枠だけで、ざっくりとした予算しか提示されていなかった。ところがいざヒアリングをしてみると、部屋数を含めさまざまな要望が寄せられ、それらの要件が整理されないまま設計側へ発注されるという、難しい条件下での設計を強いられることになってしまった。

「養命酒造、行政、住民の要求をすべて受け入れると、とても予算内におさめることはできません。そこで、要求をすべて入れ込むと見込み金額が予算の倍以上にオーバーすることを提示しながら、調整、話し合いをしていくことにしました。いうなれば、減額ワークショップですね」と藤村さんは笑う。

共同設計と合意形成の新しい手法

eコラボのプランを決める際にも、パブリック・ミーティングは計5回行われた。ただし、鶴ヶ島プロジェクト2012では5回とも同じプロセスを繰り返したが、実際に建築することが前提になっている今回は、最終的なプレゼンテーションでは、10名の学生が類型別の3グループにまとめられて、共同設計というかたちで三つのプランを提案した。そしてその3案に対する投票を踏まえ、それらを再統合するかたちで最優秀案が決定した。これは、このパブリック・ミーティングにおける投票は、単に多数決で案を絞り込むものではなく、投票というかたちで関係者の意向を探り、新たなプランを提案するというプロセスをもつからだ。

したがって最終的には、藤村さんと、東洋大学建築学科教授の工藤和美さんが専門家としてディレクションを行い、各学生の提案のなかでそれぞれ評価された要素を取り入れ、一つのプランにまとめあげた。加えて、藤村さんと工藤さんが新たに提案したアイデアも盛り込んだという。

「当然、単に要素を寄せ集めてしまうと、まとまりのないデザインになってしまいますが、一方で建築の世界では、共同設計というと凡庸な建築になるという批判もある。そこでディレクションにあたっては、共同設計という形をとりながらも、平均化したつまらない建築にならないよう心がけました」

藤村さんがそう言うように、その佇まいは、とても十数人ものアイデアが集約されているとは思えないほどに統制されている。しかしシンボリックな切妻の大屋根、平家、ベンチ、路地、広場なども、それぞれ学生たちのアイデアが少なくとも一つ以上取り入れられ、再構築されたものだ。

「ここで重視したのは、参加者に実際に形を見せて選んでもらう、という手法です」と、藤村さんは言う。何もないところから住民にヒアリングすると、どうしても安心、安全、便利、快適といった、公平で正しいけれど、ありきたりな言葉が並びがちだからだ。また、それらを体現しようとすると、平準化されたつまらないデザインになってしまう。そこで、専門家が、具体的なデザインをオプションとして提示しながら、住民に選んでもらうようにしたのだという。

このように実際に形を見せるなかで、「高齢者の利用を考えると平家がいい」「地域の顔となるようなシンボリックな存在にしたい」といった具体的なイメージが固まっていった。また、どの案を採用するとどれだけの予算がかかるかを開示して、予算を下げるために何を削るのか、具体的に形を示しながら検討できた点も、住民の納得感を深め、スムーズに合意形成を進めることができた要因といえる。

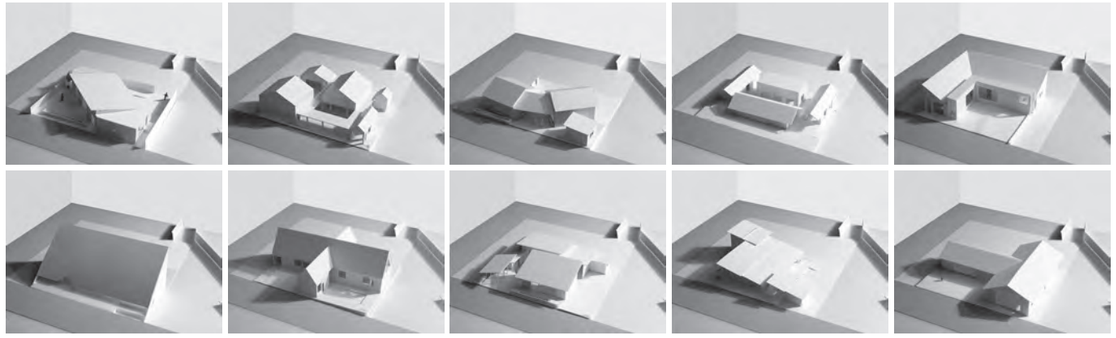
「もちろん、なんでもかんでもオープンにしてしまうと、設計者や現場の裁量が減って、臨機応変な動きができなくなります。さじ加減は難しいところですが、オープンにすることで議論が活性化し、皆が納得して案を選定できたのは非常によかったと思います。合意形成に至るまでの対話には時間もコストもかかりますが、その分、リスクヘッジになる。トータルで見れば、こうした方式を取ることは、コストも時間も圧縮できるように思います」と藤村さんは振り返る。

●ノウゼンカヅラに覆われたパーゴラと広場（photo:斎藤夕子）

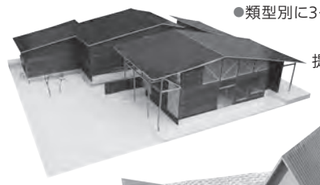
●隣接する鶴ヶ島太陽光発電所からの眺め。1万枚のパネルで発電出力は1990kW。一般家庭の400～500世帯分程度の年間電力消費量を賄う（photo:斎藤夕子）

未来の公共建築の行方

eコラボは、建築のプロセスに住民を巻き込むことでまちづくりへの関心を高める試みだったが、完成後も住民参加の仕掛けをいくつか用意した。壁の一面をあえて未塗装にして完成後にワークショップを開いて塗装をしたり、太陽光発電所の敷地に防塵のための緑化植物「クラピア」を植栽するワークショップを開催したり、住民の愛着の醸成にも務めてきたといえる。また、年に1度開催される「eコラボまつり」では、施設やまちづくりについ



●パブリック・ミーティングの初期段階で学生によって提案された10案



●類型別に3グループにまとめられた学生チームによって提案された3案（左3点）

●パブリック・ミーティングの様子

●これまでのパブリック・ミーティングで評価されたアイデアを盛り込み、最終案として提案された模型（photo提供:RFA）

て話し合うシンポジウムを開催したり、地元住民らによる出し物や模擬店を出店したりするなどして、1000人を超える来場者を集めている。

しかしオープン後間もなく課題も浮き彫りになった。普段の利用者数が思うように伸びないのだ。

●eコラボの管理を受託しているNPO法人鶴ヶ島第二小学校区地域支え合い協議会のメンバーの一人、久保島久和さん。生まれ育った地域に貢献できることにやりがいを感じているという（photo:斎藤夕子）

「小学校の環境教育の授業には利用されていますが、日常的に住民が訪ねてくるような仕掛けをもつ施設ではありません。一番利用が多いのは、他の自治体からの視察でした」（藤村さん）

そこで関係者で話し合いをするなかで、この施設を積極的に活用すべきだという方向性を確認して動き始めた。最近では、指定管理者としてeコラボの管理・運営を行っているNPO法人鶴ヶ島第二小学校区地域支え合い協議会や地域住民、養命酒造などが主体となり、自主運営によるサイエンス教室や講演会、野鳥観察や落語会などの催しが開催され始めてもいるという。

「3年目にしてようやく、パーゴラのノウゼンカズラも茂って日除けができ、広場で快適に過ごせるようになりました。より柔軟に施設運営をすることで、もっと人が集う施設にしていきたいですね」と藤村さんは展望を語る。

今や、限られた財源のなかで、いかに効率よく公共建築をつくり、行政サービスを享受していくのか、そこに暮らす人々が皆で知恵を絞り、行動すべき時にきている。実際に、各地で住民との協働によるワークショップが開催されるなど、さまざまな手法も模索されている。そうしたなかで、産学官民の連携を育む手法としてパブリック・ミーティングを取り入れた鶴ヶ島プロジェクトは、画期的な取り組みといえるだろう。なによりeコラボは、鶴ヶ島プロジェクトに携わってきた人々にとって、与えられた施設ではなく、自分たちの意思でつくりあげた施設である。この経験を生かして、本番となる公共施設の再配置、超高齢社会の経営という本丸の課題に向き合えるかどうかに、鶴ヶ島市の未来はかかっている。

女川駅前にぎわい拠点／シーパルピア女川

中心市街地から復興の狼煙をあげる

取材・文:斎藤夕子
photo:佐藤真

「シーパルピア女川」		
	所在地	宮城県牡鹿郡女川町
	敷地面積	5150.83㎡
	建築面積	2420.46㎡
	延床面積	2299.44㎡
	構造・階数	木造、鉄骨造・地上1階
	設計（意匠）	東環境・建築研究所
	建築主	女川みらい創造株式会社
	竣工	2015年12月

被災地第1号の「新しい町」

仙台から東北本線で小牛田（こごた）へ。そこから石巻線に乗り換えて女川へ向かう。女川の一つ手前駅の浦宿から小学3、4年生くらいだろうか、女の子3人組みが乗車してきた。最初からなかなか賑やかではあったが、間もなくトンネルに入ると「キャー!」と叫んで笑いあっている。子どもだけのお出かけは興奮するものだろうが、何がそんなに面白いのか、訝しく思って気づいた。東日本大震災で鉄道が不通になって以降、石巻線最後の一区間として浦宿-女川間が再開したのは2015年3月21日で、まだ1年少々しか経っていない。10歳前後の彼女たちにとってそのトンネルは、新しいアトラクションのようなものだったのかもしれない。

終点の女川駅。建築家・坂茂氏が設計したその駅舎には、「女川温泉ゆぽっぽ」が併設されている。後で聞いた話しでは、以前の女川駅の隣に町営温泉があったため、今回、駅と合築させるかたちで再建したそうだ。大屋根を戴く駅舎のフォルムは、ウミネコが羽ばたく姿をイメージしたものだという。外壁には宮城県産の杉材が使用され、暖かみと清々しさが感じられる。

その駅舎を抜けて、まず目を奪われるのが、駅前広場から海に向かってまっすぐのびる広々とした道だ。なだらかな下り坂を描く道の両側には、切妻屋根の民家のような、平屋の建物が軒を連ねている。まだ真新しさを感じさせるその街区は、2015年12月23日に町開きした「女川駅前商業エリア」だ。被災地では初めて中心市街地として整備された新しい町である。

●建築家の坂茂氏が設計した「女川駅・女川温泉ゆぽっぽ」。女川町が建設した駅舎をJRに賃貸、温泉の運営は民間に委託している。つまり公設民営の施設だ

●女川町産業振興課公民連携室係長の土井英貴さん

「駅前には換地により、町の各所に点在していた町有地を集めました。駅前からまっすぐ伸びるプロムナード〈レンガみち〉は歩行者専用道ですが、これも町道です。駅は、昔より200mほど内陸側にバックして、現在、海岸線から約400m内側の海抜11mのところに建っています。ですが、今見えているこの一帯は災害危険区域なので、基本的には人が暮らすことはできません。住宅街はこの駅よりも高台、海抜約20m以上のところに整備されつつあります。役場や小中学校も、山を拓き、地盤整備が整い次第、駅周辺の高台に集められます。ですがまずは、この商業エリアを先行的に整備して、ここに町の賑わいをつくり、経済的な活気を生み、それを周りに波及させていく。地価をあげ、土地の資産価値を高めることで、女川を持続可能な町にしていこうというのが、基本的な作戦な

●駅舎3階から、新しい女川の町を見る。目の前に広がる海まで、プロムナードがまっすぐに続く

んです」

駅舎の3階、展望台として設えられたスペースに立ち、女川の新しい町を見渡しながらそう教えてくれるのは、女川町産業振興課公民連携室係長の土井英貴さんだ。

海と共に生きる決意

女川町の中心市街地として設定されているのは、女川駅から海までの間に広がる約7.4ha。そのなかで、とくに先行的に整備が進められたのが、昨冬町開きされたプロムナードに接するエリアで、ここは観光交流を主眼に置いた「シンボル空間」と位置づけられている。

ここには現在、大きく分けて5棟の施設が新設されている。まず、駅舎と温泉施設が一体となった「女川駅・女川温泉ゆぽっぽ」（整備主体：女川町／指定管理者：女川町ゆぽっぽコンソーシアム）、ミーティングやワークショップに利用できる「女川フューチャーセンターCamass」（整備主体：NPO法人アスヘノキボウ）、商業施設「シーパルピア女川」（整備主体：女川みらい創造株式会社）、水産業体験館「あがいんステーション」（整備主体：復幸まちづくり女川合同会社）、町の公共施設である「女川町まちなか交流館」（整備主体：女川町／指定管理者：女川町商工会）がそれである。さらに今年度中には、海に近い一角に、女川みらい創造株式会社が整備する海産物の販売や飲食提供を行う「（仮称）物産センター」がオープンする予定だ。

また、その周辺には自立再建事業者によって、いくつかの飲食店、家電販売店、タクシー会社などの店舗や事務所も建ち始めている。今後は郵便局と銀行3行が、このエリアに集められる計画だ。なお、それらの土地は必要な道路や駐車場などを整備したうえで民有地として換地したもの。プロムナード周辺エリアとも連動して一体的な賑わいが創出できるような動線計画がなされている。

●駅舎の裏側では、山を拓いての造成が続いている。住宅地の形成はまだこれからだ

「現在、海側では国道の整備が進められており、今後その先に、被災交番を保存展示するメモリアル公園が整備されていきます。女川は防潮堤をつくらなかったのかと思われるかもしれませんが、そういうわけではありません。国道が海抜5.4mまで嵩上げされてるので、これが防潮堤の役割を果たします。この高さは明治三陸津波と同程度の津波から町を守る、つまり、100年に1度レベルの津波を防ぐものとして想定されている〈L1〉と呼ばれる基準です。今回のような津波を防ごうとすると、15m以上の防潮堤を築くことになり、海と町は完全に分断されてしまいます。一方で、これ以上土地を嵩上げしようといっても、そのための時間や費用を考えたら、現実的ではありません。いずれにしても女川は、水産業を基幹産業とする海辺の町です。海と町を分断するという発想は、私たちにはありませんでした」

土井さんはそう言って、「これ以上時間をかけたら、人が住める町になる頃には、今いる住民が誰もいなくなっているかもしれません」と苦笑する。事実、震災前まで1万14人だった女川の人口は現在約6800人にまで減少した。高齢化率は宮城県内2位で36.3

左上●NPO法人アスヘノキボウが運営するコワーキングスペース「女川フューチャーセンターCamass」。有料のワーキングスペースと、コンテナを使った無料で多目的に利用できるスペースが併設されている
右上●町の人々や来訪者が気軽に立ち寄り、交流できることを目的に設立された公共施設「女川まちなか交流館」。女川町商工会の事務所が入居すると共に、指定管理者として施設の運営を担っている
右下●復幸まちづくり女川合同会社が運営する水産業体験館「あがいんステーション」。外観は、旧女川駅を復元した。物産販売を始め、女川の水産業を活性化するためのさまざまな取り組みを行っている

% (2015年度) に及ぶ。時間との闘いは切実なのだ。

なお、シンボル空間に建つ新築5棟の施設に対してあえて整備主体を記したのは、土井さんの所属が「公民連携室」であることからもわかるように、女川の新しい町は、官民の強力なタッグによって創造されつつあることが一つの特徴だからだ。このことが、まちづくりに対する合意形成をスピーディにしている要因でもある。なかでもそれを象徴するのが、プロムナードに軒を連ねる民家のような商業施設「シーパルピア女川」である。

●歩行者専用のゆったりとしたプロムナードをそぞろ歩く人々

●シーパルピア女川の入り口付近は「デイリーエリア」として設定されている。果物店と薬局の間にある空間の奥には、今後、郵便局がつくられる

路地や広場を楽しむ、分棟形式の商業施設

「シーパルピア女川」は、木造5棟、鉄骨造1棟の計6棟の平屋が分棟形式で配置されたテナント型の商業施設だ。

それぞれの建物には、衣料品店、生活雑貨店、飲食店など27店が入居している。空間として特徴的なのは、縦軸として伸びるプロムナードに対し、すべての店舗が間口を構えるのではなく、横軸方向に伸びる小さな路地、たまり場となる広場や中庭の奥にも店舗を設け、奥行きのある空間を構成していることだ。またプロムナードが緩やかな下り坂であるため、建物へのアプローチや路地にも小さな階段が設けられている。このことが風景を単調にせず、町並みに多彩な雰囲気を与えている。

設計を担当したのは、東京を拠点とする東環境・建築研究所。代表の東利恵氏は設計のコンセプトについて、「大きなボリュームの建物ではなく、女川町にふさわしい懐かしい風景をつくりたいと考えた」（「日経アーキテクチュア」2016年3月16日号）と語っている。

その設計者を選び、テナントを決め、運営を担っているのが「女川みらい創造株式会社」だ。専務取締役の近江弘一さんも「女川の夏は涼しく、冬は雪が少ないという気候や、目の前に海を望む景観の象徴性などに非常に配慮した設計プランを提示してもらうことができました」とこれを評価する。

「シーパルピア女川」に入居する27店は、被災事業者14店、町内からの創業・新規事業者7店、町外からの誘致6店。町の生活者にとって必要であり、かつ、観光で訪れる人々を惹き付けられるような事業者を選定したという。駅の近くには主に住民の日常生活をサポートするミニスーパーや調剤薬局を配した

●女川みらい創造株式会社専務取締役の近江弘一さん

デイリーエリア、その先には来訪者にも対応できる飲食店が集まるエリア、ファッションや雑貨の小売店が集まるエリアが、ゆるやかなゾーニングによって配置されている。近江さんは「飲食店をまとめたエリアは路地に居酒屋が寄り集まる雰囲気で、女川の夜の顔がうまく演出されています。またその背後には今後、自立再建の飲食店ができてきますから、いずれ女川は日本一はしご酒がしやすい町になるはずです」と笑いながら言う。

これらの入居店は、シーパルピアの設計と同時に選考が進められた。まだ、どのような建築になるかが具体的に示される前から入居者を募るのはチャレンジングでもあったが、上記のような店舗の配置計画と共に、それぞれに求められる業種、また、事業収支のシミュレーションなどを提示して入居者を募ると、地元からは40弱の入居希望が集まった。ただ、建築にかかる費用や今後の維持・管理費から算出された坪4000円／月という賃料、定期賃貸5年という期間、営業時間や定休日の設定などを具体的に検討していくうちに、被災事業者による店舗数は自ずと現在の数に落ち着いたのだという。

「この一帯は、人が歩いて楽しめる町にすることを重視しました。プロムナードでは子どもたちがどんどん走り回って、楽しそうに過ごしてくれています。子どもたちが安心して過ごせる空間になっているんだなと思うと、嬉しいですね。また、テイクアウトもできるコーヒーショップを新たに誘致し、社会人サッカークラブ〈コバルトーレ女川〉の新規事業としましたが、地元のお年寄りたちが中庭のベンチでコーヒーを飲んだり、町歩きをしている姿には、この町に、新しい文化が育まれてきたことを感じます」（近江さん）

この他、新たに誘致した店舗にはアトリエを併設したスペインタイル店やエレキギター工房などがあるのも特徴的だ。ここには、消費だけに頼らずに楽しめる町にしたいという意図がある。さらに今後、メモリアル公園が整備されてくれば、人が自然と集まり、歩き、佇み、何気なく交流できるような町並みがいっそう充実してくるだろう。

世代、立場を超えた連携

ところで、「女川みらい創造株式会社」は、「シーパルピア女川」のみならず、駅前商業エリアのマネジメントを行う事業体として2014年6月23日に設立されたまちづくり会社だ。

通常、まちづくり会社というと自治体が資本金の大半を占めるかたちで設立されることが多いが、みらい創造の設立にあたっては、町の出資率は24%に抑えられた。他は、女川町商工会の26%を筆頭に、女川魚市場買受人協同組合、一般社団法人女川町観光協会、復幸まちづくり女川合同会社がそれぞれ資本比率をわけている。これは、行政の関与を低くとどめることで、事業性や採算性に対し、民間として柔軟に対応していくための工夫だ。ただ通常は、主に公益的な仕事を担うまちづくり会社では、事業の収支計画や将来性などが明確ではないために民間からの資本が集まりづらい。しかし女川では、それはごく自然な流れで成立したという。

そもそも、震災からわずか1カ月後の2011年4月19日、女川の産業界が中心となり「女川町復興連絡協議会」が発足。行政とのパートナーシップにより、復興を推進していこうという体制が築かれた。以降、住民生活のベースとなる部分は行政が、経済的な復興は民間が中心となって、つまり、お互いの得意分野で力を発揮しながら共にまちづくりを進めることが、非常に早い段階から確認されてきたのだ。

また女川復興連絡協議会が発足した際、その中心となった女川の老舗かまぼこ店「高政」社長で女川町商工会長も務める高橋正典さんが、「60代以上は全員顧問、手も口も出すな。50代は口は出しても手は出すな」と発言したことも、女川の復興まちづくりを方向づけた。以降女川では、40代、30代が中心となり、まちづくりを考え、実践していく。ちなみに、2011年11月に女川町長に就任した須田善明氏も現在44歳という若さである。町長という肩書きを超えて、率先して町内各地をまわり、まちづくりに関する説明会を開催したり、住民との対話を重ねてきたという。土井さんは「若い人の経験が浅い部分は、手は出さないと言った方々ががっちり後ろに控えてサポートしてくれています。だからこそ、町の若手が既成概念にとらわれず、いろいろとチャレンジできるんです」と言う。行政と民間、若手とベテラン、それぞれが互いの立場やできることの違いを認めあいながら、そのうえで協力しあおうというコンセンサスが築かれているのだ。

「ただ私は50代なので、手を出していいのかって確認しましたよ」と近江さんは笑いながら言う。近江さんは他に、社会人サッカーチーム「コバルトーレ女川」を運営する有限会社コバルトーレ取締役社長及び、株式会社石巻日日新聞社代表取締役社長を務める人物。出身は石巻市だが大学進学と共に東京に出て以降、24歳で自らの趣味でもあったマリンスポーツ関連の事業を起業、全国を飛び回りながらいくつもの事業を手がけてきた。それが再び故郷に戻ったのは2006年。そこからは自らを育ててくれた地域に貢献することを人生のテーマと定め、これまでの事業から退き、新たに、社会人サッカークラブによる地域活性化を目指し「コバルトーレ女川」を設立する。またちょうど同じ頃、創刊100年になろうかという夕刊紙「石巻日日新聞」の経営立て直しへの参画を請われた。これまで培ってきた経営手腕を生かし、約1年でこれを達成。2009年からは同社社長に就任した。つまり近江さんは、女川と親密にかかわりをもちながらも外部からの視点も有する経営のプロ。女川町からしてみれば、まちづくり会社設立にとって、願ってもない人材だったといえる。

住民の熱意がつくる町

「昨年3月にJRが開通して、その時にも町開きのイベントを行ったんですが、まだ駅前には何もなくて、来ていただいた方からも〈食事をするところもない〉とお叱りを受けました。それが、12月の町開きの時には、公共施設としての交流館も竣工していましたし、全国ネットのテレビや新聞などのマスコミにも来ていただいて、ずいぶん盛り上がりました。ただ、それも最初だけかなと心配していましたが、観光目的で来られる方は、どんどん増えているようです。全体としての具体的な数字は出していませんが、サッカークラブが経営しているコーヒーショップだけで言うと、この3月は震災から5年目の節目だったこともあって来店が多く約4000人、それ以外の月でも平均2000人くらいの方に来ていただいています。ですから、今年の冬の物産センター開店も視野に入れると、全体で年間50万人強の集客にはなりそうです」

町開きから約半年、町の賑わいは計画段階で見通していた水準には達していると近江さんは言う。また土井さんも「そもそも平日に、人が町なかを歩いているというだけで、今までとはずいぶん違います」と笑顔で語り、「この賑わいをいかに持続させられるかが鍵ですね」と言葉を継ぐ。現在、プロムナードの周辺には自立再建事業者も含めると約40店舗が営業しており、さらに2018年度までには70店舗まで増えることが予定されているという。

土井さんは「今私たちが進めている事業の本当の答えがでるのは10年、20年先。ですが今は、ベストだと思う道を進んでいます」とも語った。これから10年、20年先に女川がどんな町へと成長しているのかはまだ見えない。ただ今、この町に育まれている「いい町をつくろう」という、住民一丸となった熱い思いが、良い結果につながらないはずはない。少なくとも、町を訪ねた人間がそう感じるだけの空気が、女川には満ちている。

●分棟形式で配置されたシーパルピア女川には、プロムナードの奥へと続く路地や、奥まった中庭のようになった広場が随所に設けられ、のんびり歩き回れる雰囲気が形成されている

●今年4月にオープンしたばかりの「GLIDE garage」。エレキギター工房を備えるこの店は、ギター好きが集うスペースになりそうだ

●現状でのプロムナードの突き当たりでは防潮堤を兼ねた国道と、その先に広がる、被災交番を保存展示するメモリアル公園の整備が進んでいる

真壁伝承館

町の歴史を映す公共建築のかたち

取材・文:**杉山衛**
photo:**坂本政十賜**

所在地――茨城県桜川市真壁町
敷地面積――3,271.49㎡
建築面積――1,728.84㎡
延床面積――2,742.64㎡
構造・階数――鋼板パネル付き鉄骨ラーメン構造・地上2階
設計――設計組織ADH（木下庸子＋渡辺真理）、新谷眞人（構造設計）
建築主――桜川市
竣工――2011年6月

重伝建地区の多目的公共建築

「真壁伝承館」のある茨城県桜川市は、東京から直線距離で約70㎞、筑波山の北側、北・東・南の三方を阿武隈山系の山並みに囲まれた北関東に位置している。市は、いわゆる平成の大合併の一つとして、2町1村が合併して2005年10月に誕生した。「真壁伝承館」は市の南部にあたる真壁地区の、真壁町真壁の町なかにある。

取材へはクルマで向かったが、真壁の町は、山すそになだらかに広がる田園に、突如として街区が出現したという印象だ。町の歴史は、平氏に連なる武家、真壁氏がここを拓いた中世にさかのぼる。戦国時代末には真壁城の城下町として発展し、江戸時代には近畿地方から木綿を仕入れ、北関東や東北地方に送り出す流通拠点として栄えた。

「電車も路線バスもない、再開発から取り残された町となりましたが、結果として、400年以上前の城下町の町割りや古い建物が良好な状態で残ることになりました」と市の教育委員会の越田真太郎さん。真壁には99棟の登録文化財を始めとする多くの歴史的な建物があり、2010年6月には、「真壁伝承館」を含む市街地約17万6000㎡が、国の重要伝統的建造物群保存地区（重伝建地区）に選定されている。

いただいた観光パンフレットには江戸時代の古地図が印刷されていたが、それが現在の地図として使えるほど、町割りはほぼそのまま残されている。町なかを歩くと、店舗としてつくられた蔵づくりの「見世蔵」や、木造店舗の2階外壁を漆喰で仕上げた「塗屋」、栃木県産の大谷石を使った「石蔵」、「薬医門」と呼ばれる切妻屋根を乗せた立派な構えの門など、そこここに往時の繁栄を感じさせる建物を見ることができる。重伝建地区には一時代を切り取ったような町並みが多いが、真壁では江戸時代から明治、大正、昭和初期まで、さまざまな時代の建物が見られることも、大きな特徴となっている。

●考古学者として陣屋の発掘にも参加した、市教育委員会の越田真太郎さん

「真壁伝承館」はそうした町の中心に、公民館機能、図書館機能、資料館機能をもつ複合施設として、2011年9月1日にオープンした。

上●大正2年に建てられた中村家の見世蔵
右●白く塗られた壁面が印象的な江戸末期の見世蔵（川島書店）

歴史的意匠を採寸し再構成する

「以前ここには昭和40年代に建てられた鉄筋コンクリート造の公民館があり、それ以前は小学校や町役場と、代々公的な施設のあった場所でした。そのおおもとは江戸時代の陣屋です」と越田さん。この陣屋には、真壁城廃城後にこの地域を治める代官が駐留した。以来時代によってかたちを変えながらも、ずっと政治の中心、町の中心として機能してきたことになる。合併後の公共建築の再編により公民館の再建が決まり、併設されていた図書館と資料館を含む新たな施設が計画された。建設に先立って陣屋の遺構が発掘調査され、館（やかた）を囲むように池や堀が配されていたことも確認された。伝承館の敷地内には、埋め戻された遺構をわかりやすく示す「遺構表示」もなされている。

●明治中期に建てられ昭和初期に改造された星野家の店舗

こうした歴史あるロケーションに新しく建てられる公共建築には、どんなかたちがふさわしいのか。建替えにさえ反対意見のあるなかで、市は建築計画の公募に際して、「歴史的建築が多い場所にふさわしい施設であること」と「ワークショップにより市民が建築に参加すること」との二つの条件を挙げた。応募総数は150件以上にのぼり、そのなかから2段階のコンペティションを経て、2007年に設計組織ADHの基本案が選ばれた。

特徴的なのは「サンプリングとアセンブリ」という、新しい建築手法が用いられていることだ。真壁にある歴史的建造物のボリューム（量感）やプロポーション（比率）を徹底的に調査・採寸（サンプリング）し、伝承館の建築として再構成（アセンブリ）するという方法だ。設計者の一人である渡辺真理氏が「建築通信新聞」のインタビューに答えて、「サンプリングしたボリュームは、かなり厳密にそのまま使った」と語るように、屋根の勾配や形状は採寸通りに再現するなど、厳密なルールを決めてこの手法を徹底させている。

●旧真壁郵便局（昭和2年）のある御陣屋前通りには、大正時代の木造真壁（しんかべ）造りの店舗も並ぶ

とくに移動客席240を含む、最大300名のキャパシティをもつ「まかべホール」の屋根は、採寸した伝統建築の屋根のボリュームで三つに分割されているため、3棟が並んでいるように見え、建物の大きさを感じさせない。その屋根の軒下は角度をもって白くもち上がり、町なかで見る蔵の屋根と同じ意匠だ。古い建築の形をそのまま写し取って再現することで、歴史的な町並みに違和感なくマッチさせているのだ。

市民の思いが見えたワークショップ

「真壁伝承館」は、西側の正面入口から東へ、奥に行くほど狭くなる台形の敷地に、中庭を囲むようにして2階建ての棟を配している。入口は手前に傾斜する屋根を見ながら入る平入りで、これは見世蔵と同じ形式。ここからは奥にすっと中庭が伸び、その向こうに筑波山に続く山並みが見える。こじん

まりとした気持ちのいい中庭だ。

入口に立つと、左手にインフォメーションロビーのある事務室と、会議室、和室、音楽スタジオなどがある「本館」と、その奥に「まかべホール」、右手には「歴史資料館」、その奥に細長い「真壁図書館」が続き、4棟の建物が集まっているように見える。しかし2階の平面図を見ると、本館、歴史資料館、図書館がつながり、ホールも1階の通路でつながっているため、使い勝手としてはまるで1棟のような一体感がある、ちょっと不思議な構造だ。地元の特産である真壁石が敷かれた中庭は、奥に行くほどすぼんでいく形が遠近法の効果を生むためか、実際よりも奥行きがあるように見える。

こうした建物の配置や、サンプリングしたボリュームやプロポーションのアセンブリの仕方には、もう一つの市の条件である住民参加も大きな役割を果たしたという。設計にあたっては、2008年の3月以降3回のワークショップが開催され、とくに約30名の市民が参加した第1回では、それぞれ三つのグループに分かれて、自分たちの手で敷地に建物の模型を並べながら、全体のおおまかな配置が検討された。

先のインタビューで渡辺氏は、当初バラバラだと思われた市民の意見も、以前公園だった面積は残したい、隣にある社（神武天皇遥拝所）と接する場所は、この地に400年続く祇園祭の中心となる場所であるため、神輿や山車が集まるオープンスペースとしたいなど、市民自身も「意識していなかった」同じ思いが、ワークショップを通して見えてきたと語っている。3回のワークショップを経て、最初の計画から7回も練り直されたというほど、市民の意見が反映されたプロジェクトとなっている。

まちづくりへと高まる意識

「こうした調査やワークショップが進むなかで、きっと多くの市民のみなさんが、自分たちの町の魅力に気付いたのでしょうね、まちづくりの団体が組織され、個々の登録文化財からさらにワンステップ進んで、町全体を国の重要伝統的建造物群保存地区にしようという機運が高まったようです」と越田さん。

1996年にできた登録文化財制度を利用して、真壁にある歴史的な建物の文化財登録を主導したのは、地元の町並み保存団体である「ディスカバーまかべ」と、歴史好きな当時の町長だったという。1999年の「潮田家住宅」の認定を皮切りに、現在99を数える登録数は全国でも屈指だ。また真壁といえば、「ひなまつり」を思い出す人もいるかもしれない。こうした歴史的な建築を中心に、毎年2月4日から3月3日の1カ月間にわたって、店舗や土蔵の他、道に面した住居の窓などにさまざまな時代のお雛さまが飾られる。

その正式名称は「真壁のひなまつり～和の風第○章～」（ちなみに次回は15章）。寒い時期に真壁に来てくれる人をもてなしたいという町の有志の思いから、2003年に約40軒で始まり、次第に市民の自発的な参加の輪を広げて、今年は160軒以上が参加する町をあげてのお祭りに成長した。歴史のある町らしく江戸時代の古い雛人形も並び、期間中は約10万人の観光客が真壁を訪れるという。伝承館のプロジェクトは、先行するこうしたまちおこしの活動とも合流し、地域の活性化に向けた相乗効果を生み出し始めている。

厳格な保存や運用の規定がある指定文化財に比べ、広く地域の歴史的文化を残すことを主眼とした登録文化財は、大きな外観の変更や移築を伴わない限り、内部を改装して、ホールやレストランなどに活用することも可能で、観光資源としての活用と歴史的町並の保存が両立できる、真壁の町にとっては格好の制度だといえるだろう。

さらに2010年に重伝建地区に選定された市街中心部は、伝統的建造物の保存修理や、新築時の外観を町並みに合わせる修景事業に補助金を活用することができる。

伝承館の開館を目前にした2011年3月、真壁の町は東日本大震災で被災し、伝統的な建造物を中心に、屋根が

●平入りの様式の正面玄関。左手駐車場の奥に、祇園祭で御仮屋となる「神武天皇遥拝殿」の鳥居が見える

左●伝承館東側。三つの屋根に分割され、ボリュームの大きさを感じさせない「まかべホール」（右）と、図書館に併設されたガラス張りの子ども室が見える
上●図書館1階。構造材と同じ鋼板を溶接した、つくり付けの書架やスツールが配されている

破損したり瓦が落ちるなどの大きな被害を被った。5年経った今も、青いビニールシートに覆われた登録文化財など伝統的建造物が散見される。今回の震災では、重伝建地区の周囲に広がる登録文化財の修復にも、手続きに時間はかかるが、承認されれば市の他に国や県からの補助もおりることになっており、登録文化財であることが災害からの復興の一助ともなっているようだ。

現代建築としての新しい部材と工法

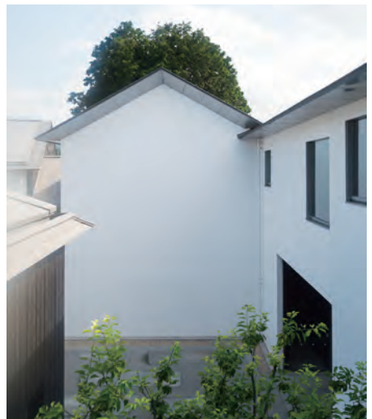
「真壁伝承館」を魅力的にしているのは、サンプリングとアセンブリという建築の手法だけではない。ともすればがっしりとして重みのある伝統的建築に対し、「真壁伝承館」には独特の軽さがあり、この建物が現代の建築であることを印象づけている。この軽さを実現したのが、あまり建築には使われることがないという鋼板の使用だ。

伝承館は、工場生産された約6m×2mの鋼板を、現地で溶接して組み立てている。強度と剛性の高い鋼板なので部材を薄くも細くもでき、サンプリングされたプロポーションを的確に再現できると共に、そこに独特の視覚的な軽さが生み出されている。外壁の陽のあたる面は、鋼板にスギ板を張って黒く塗り、直射日光を和らげ、陽の当たらない面は、鋼板に直接白い遮熱塗料を塗布して仕上げられている。これによって白と黒の美しいコントラストが生まれている。

ためしに白い外壁に磁石を近づけると、ピタリと吸い付いた。内壁も構造壁であればすべて鋼板であるため、ポスターや告知を直接磁石で留めることができ、とても便利だ。中庭では壁と磁石を使ったワークショップも行われるという。また図書館では、壁面に直接書架の棚板が溶接されている。こうした造作も鋼板ならではのものだ。中庭に面した図書館の白い壁面には、大小さまざまの大きさの四角い窓や丸い明かり取りがランダムに並び、伝承館のなかでもとりわけ美しい姿を見せているが、これも、強度さえ確保すればどこをどんな形にでも切り抜ける、鋼板だからこそできるデザインだ。「でもやっぱり冬は寒く、夏は暑いと感じるのは、鋼板製だからかな」と、越田さんは笑う。

かつてここにあった公民館は、コンクリートの大きなボリュームをもっていたという。それが低層の伝承館になったことで、町の見晴らしがよくなったと喜ぶ声もあった。伝統的な形を写しながらも屋根に瓦を乗せず、金属葺きであることに、賛否両論が上がったともいう。そんな声が聞かれるほどに、「真壁伝承館」の試みは、自分たちの町の公共建築を自分たちでつくるプロジェクトになった、といえるのではないだろうか。

上●白い塗装壁面と黒塗りの板張りが印象的な中庭。左が会議室などがある本館、右が歴史資料館。奥に続く図書館の壁面にランダムに配置された窓が美しい
右●伝統的なプロポーションと薄い鋼板によるシャープな形が融合した、古くて新しい形



連　載

スキマファイル no.08

高層ビルが背丈を競い合っている今日この頃、ふと、足元を見れば、隙間がじわじわと増殖中だ。都市の空洞化を嘆く御仁には、隙間は負の象徴に見えるのだろうが、断じてそんなことはない。隙間にこそ、都市の未来が隠れているからだ。「都市には隙間が良く似合う」とは誰の言葉だったか。この言葉の意味を探るべく、都市にスキマを探しに行く。スキマ探検隊、いざ出陣!!

見上げればスキマ
大東京天空庭園巡り

［今回探検した場所］**JR山手線の周囲**　［ゲスト］**石津修之さん**第一生命財団

構成・写真：**スキマ探検隊**　イラストマップ：**小夜小町**

スキマ探検隊とは、サッチン、ユーコ、オマチマン、サヨちゃんを中心に編成されたスキマ愛好家グループ

アーバンオアシスとしての屋上

昭和30年代に生まれ育った者にとってデパートの屋上といえば、なんといっても遊び場でした。小さな観覧車やメリーゴーランド、ミニゴーカートがあって、そうしたアトラクション（そんな言葉はまだなくて遊戯施設と呼んでました）で遊ぶのが、子どもたちの何よりの楽しみでした。デパートの屋上は、子どもたち、いや親御さんにとっても、立派な遊園地であり小さなテーマパークだったのです。

あれから50年。そういえば、デパートの屋上でゴーカートに乗ったなんて話はきかなくなりました。ちょっと気になって調べてみたら、観覧車はおろか、ゲーセンもありません。仮設ステージやペットショップ、ゴルフの打ちっぱなしやバッティングセンターすら見なくなりました。

代わって登場したのがたくさんの植物たちです。四季折々楽しめる花と緑の空間、そして見上げれば大きな空。そこは、都心にもかかわらず自然を満喫できる癒しの場。すべてとはいわないまでも、かなりの場所で、屋上が自然あふれる緑の空間へと大変身していたのです。

今日は、そんな屋上が森や林となった空中庭園を巡ります。

スキマ探検隊（以後探検隊と表記）―お昼に待ち合わせしたのが東京交通会館でした。ここの3階が、「有楽町コリーヌ」です。コリーヌとはフランス語で「丘」の意味。その名のとおり、花と緑の丘でした（**イラストマップ**①）。

石津―いきなりの屋上庭園。話には聞いていましたが、ビルの屋上がこんなことになっているとは、びっくりしました。自然を意識したウッドデッキもいいけれど、面白いのは、目の前を新幹線が走り抜けていくことです。植物愛好家にはうれしい場所ですが、鉄ちゃんのこころもワシヅカミですね。

探検隊―庭園にはベンチがいくつも置かれていて、ちょうどお昼時だったので、OLさんがお弁当を食べていました。ここは、同じフロアの反対側も屋上庭園になっていて、こっちは目の前が高速道路。

右●線路をはさんで「東京フォーラム」のアトリウムが見える。まるで巨艦の舟底のようだ。設計は、ラファエル・ヴィニリオ
下●ほぼ目線の高さで新幹線が見られるとあって鉄ちゃんには大人気とか（東京交通会館有楽町コリーヌ）

石津―さすが交通会館、名に恥じません（笑）。

探検隊―有楽町マリオンを抜けると数寄屋橋交差点、その角に今年オープンしたのが「東急プラザ銀座」（**イラストマップ**②）。ここの6階に「キリコテラス」がありました。眼下には、年末宝くじで長い行列のできる西銀座チャンスセンター、その裏側には、現在補修工事中の泰明小学校も見えます。

「水」と「緑」をテーマに、壁面緑化がユニークな「グリーンサイド」とプールのある「ウォーターサイド」。噴水ではなくて、あえてプールにしたところがなんともオシャレ。リゾート感を演出しています。「グリーンサイド」には、しだれ桜が1本植えられていて、春に来てみたくなりました。

●キリコテラスは「水」と「緑」をテーマにした二つのゾーンからなるが、こちらは緑のゾーン「桜ノ茶屋」。しだれ桜と壁面緑化が斬新だ（東急プラザ銀座キリコテラス）

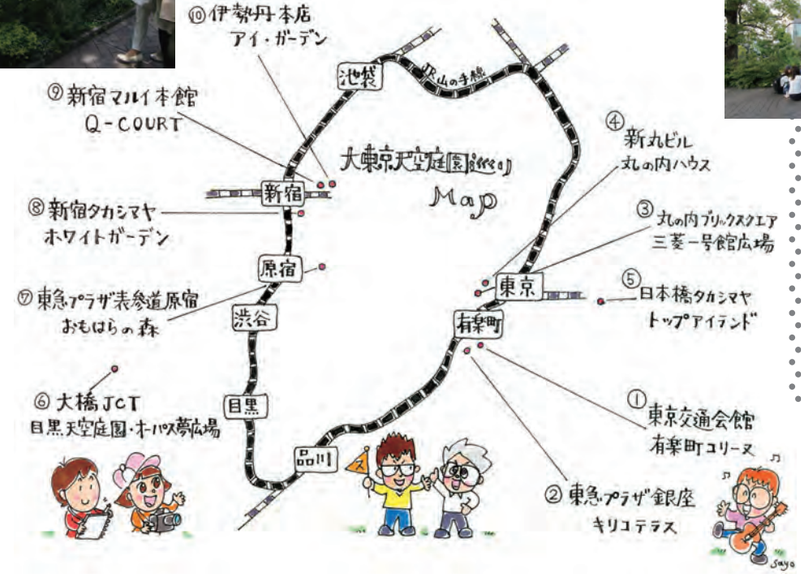
左●観賞用のプールを囲むパブリックスペースは、銀座の新たな憩いの空間。キリコテラスの水のゾーン
右●キリコテラスで一息つくスキマ探検隊。正面左より、石津さん、サヨちゃん、オマチマン、ユーコ

上●東京駅は丸の内の揺るぎなきシンボル。「新丸ビル・丸の内ハウス」からの眺め
左●レンガ造の三菱一号館美術館前の緑の場は、丸の内界隈のサラリーマン、OLさんに人気のスポット（丸の内ブリックスクエア）

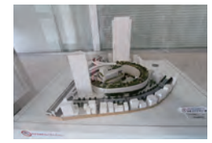
石津―プールサイドにはソファが用意されているのもうれしい。いつまでも座っていたくなりますよ、っていうか座ってました（笑）。

探検隊―新丸ビルに行く途中、ちょっと寄り道して「丸の内ブリックスクエア」（**イラストマップ**③）へ。もちろん屋上ではなく地上ですが、ビルに囲まれた中庭という点が「スキマ」なので、あえて紹介しました。かつてこの界隈は一丁倫敦と呼ばれていました。それは三菱一号館の竣工以降一帯に赤レン

●残念ながら愛犬と遊べるドッグパークは現在休園中。噴水のあるフラワーガーデンのみ開業（日本橋タカシマヤ・トップアイランド）



●目黒天空庭園は、マンション「クロスエアタワー」と9階部分で接続している。同階には「大橋図書館」などの目黒区の関連施設が入っていて、マンションの住民以外も自由に利用できる（目黒天空庭園・オーパス夢広場）

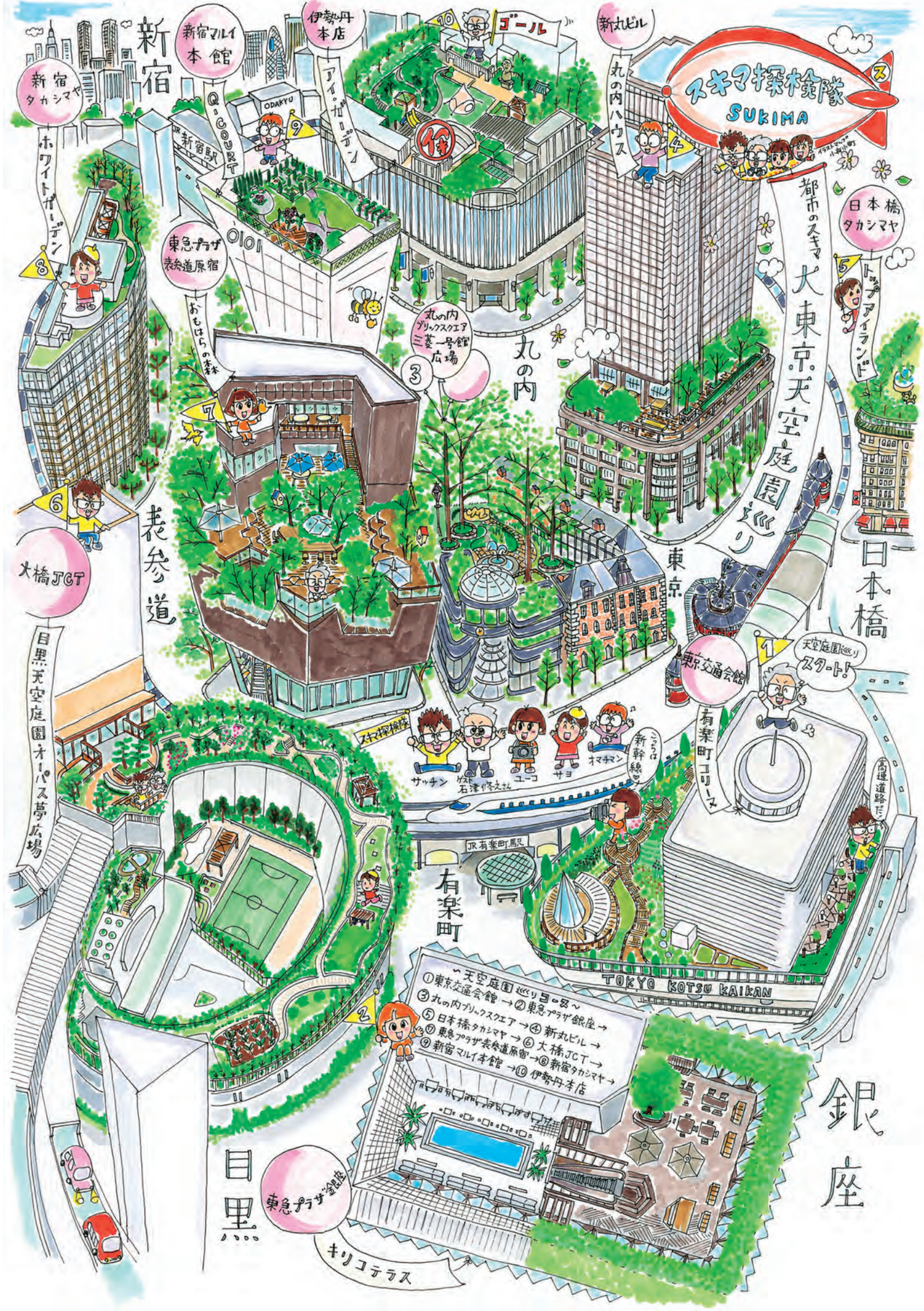


●四季の移ろいと植栽の変化を楽しめる庭や畑のあるエリア。日本庭園や芝生エリアなどさまざまなタイプの緑地空間を楽しむことができる。全体像がわかる模型も展示されている（目黒天空庭園・オーパス夢広場）

●かつての目黒川周辺の風景を再生した「おおはし里の杜」。環境保全のため立ち入りはできない（目黒天空庭園・オーパス夢広場）

●まさに都会の真ん中に出現した森といった感じ。ウッドデッキの床は段差がつけられていて丘の上を散策しているような錯覚さえ覚える（東急プラザ表参道原宿・おもはらの森）

●ケヤキやカツラなどの高木を配したランドスケープ・デザインがいい。それと中心にあるこのカウンターテーブル。仕事ができるし、ビールだって飲めるぞ（笑）（東急プラザ表参道原宿・おもはらの森）



●デートにピッタリの場所! がうたい文句。クリスマスにはライトアップも鮮やかに恋人たちを誘います（新宿タカシマヤ・ホワイトガーデン）

ガ街が形成されたからです。三菱一号館は復元されて今は美術館になっています。

石津―この丸の内ブリックスクエアには高木が24種、低木やハーブ、多年草が1万2000株も植えられているそうで、この広さにこの密度は、そうそうないと評判のようです。

屋上が森になる

……新丸ビルと日本橋タカシマヤ（**イラストマップ**④⑤）は早足で見て回り、地下鉄を乗り継いで行った先は目黒天空庭園・オーパス夢広場（**イラストマップ**⑥）。地下鉄の地上出口から見上げると巨大なコンクリートの壁。そう、ここは首都高速道路大橋ジャンクション。目指すはここの屋上。

オマチマン―本当に驚いたよ。ツアーの移動で時々通りますが（じつはオマチマンはミュージシャン）、トンネルをぐるぐる回ってそれはそれで面白いけど、まさかその屋上がこんなでっかい緑地になっていたなんて……。

石津―面積は約7000㎡。しかも、全体が勾配をもったループになっていて（高低差24m）、入り口から、大きな松の盆栽が置かれた頂上まで400mもあるそうです。

探検隊―散歩というよりもちょっとしたハイキングです（笑）。あずまやのある和風庭園があるかと思えば、野原のような「あそびの広場」があったり、築山や花壇に盆栽の庭、なんと畑までありました。四季の彩りを楽しむことができるように植栽には手間と時間をかけたそうで、それが評価されて国土交通大臣賞やグッドデザイン賞などを受賞しています。昔の目黒川の風景を再生しようとビオトープもつくられました。

……再び地下鉄に乗って明治神宮前で下車、向かうは東急プラザ表参道原宿（**イラストマップ**⑦）。

探検隊―70年代原宿を代表するセントラルアパートはもうありませんが、今は東急プラザ表参道。ここの6階屋上にあるのが「おもはらの森」です。扇形に広がるウッドデッキの階段はそのまま座れるし、さまざまなかたちのベンチが設置されていて、とにかく若者で溢れかえっていましたね。

石津―毎年夏になると「OMOHARA BEER FOREST」がオープンし、クラフトビールが楽しめるみたいです。

●アーバンオアシスは、グランピング（グラマラス＋キャンピング）のプレゼンの場?! 遠くに見えるは懐かしき伊勢丹のロゴマーク（伊勢丹本店・アイ・ガーデン）

探検隊―最後は、新宿。日も落ちかけていて一挙に3件（**イラストマップ**⑨⑩）を駆け抜けましたが、石津さん、どこがよかったですか。

石津―新宿タカシマヤ・ホワイトガーデン、新宿マルイ本館Q-COURT、伊勢丹本店・アイ・ガーデンの順番で巡ったわけですが、正直甲乙付け難い。「ホワイトガーデン」は上品な感じがしましたし、「アイ・ガーデン」は老若男女、どの世代も楽しめるような開放感がありました。「Q-COURT」は、本格的な英国様式庭園を目指しただけあって、「本物」を感じましたね。

探検隊―数種の英国様式庭園で構成されているんですが、とりわけ「薔薇の園」は、幾何学的な景観デザインと植栽の組み合わせが絶妙でした。2014年には、都市緑化機構が「2014都市のオアシス」に認定したのも頷けます。

ともあれ、10カ所の屋上庭園を巡って思ったことは、屋上緑化が予想以上に進んでいたことでした。屋上は、都市のスキマ空間であると同時に、今や、自然環境を体感できる貴重な場になっているということです。今後この動きは、さらに加速しそうです。ビルというビルの屋上すべてが森や花畑になる日も近い?!

石津―そんな日が来ることを楽しみに待ちましょう。

左●都内最大級の英国様式庭園。都会の真ん中で「本物の庭が体感できる」がウリ
右●それにしても、寛ぐのはカップルばかり

左●「新宿一の緑の舘」ですもの、入り口だって凝ってますことよ
右3点●なぜか草むらには妖精、ベンチにブタの置物。もちろん、バラはどこまでも美しく……
（すべて新宿マルイ本館Q-COURT）

連載 第⑧回

子どもたちの「笑顔」に会いに行く

2015年11月に全国各地、42件の保育園及び認定子ども園への助成が決定した、一般財団法人第一生命財団による第3回「待機児童対策・保育所等助成事業」。そのなかで、植栽を中心に、園庭整備を計画していた保育園では、春を待ち、樹木や草花を子どもたちと一緒に植えていったケースも多い。そこで今回は、園庭に豊かな緑の環境を実現した愛知県名古屋市と神奈川県川崎市の保育園を訪ねた。

取材・文・photo:**斎藤夕子**

愛知県名古屋市 リーゴ正保保育園

園庭を緑豊かな小さな森に

園庭のお披露目会

真夏のような日差しが降り注ぐ五月の土曜日。お父さん、お母さんに加え、お兄ちゃん、お姉ちゃんとも一緒に保育園にやってきた子どもたち。それだけで、十分テンションが上がっているらしく、何人もの子どもたちが、園庭に設けられた小さな築山の周りを駆け回り、木でできた緑のトンネルを、何度も走り抜けている。

名古屋市に2015年4月に開園したリーゴ正保保育園では、昨年末「待機児童対策・保育所等助成事業」の助成を受け、2016年1月、園庭に植栽を整備した。今日はその、芝生が生えそろい、木々が根づいた園庭を保護者へお披露目するのにあわせ、餅つき大会を開催するのだ。

「ずっと芝生の養生中だったので、子どもたちが中に入れないように囲ってあったんです。最近やっと囲いを取り、子どもたちは園庭全体で自由に遊べるようになりました」

走り回る子どもたちを見つめながら、そう教えてくれるのは田中佳子園長だ。

「今日の餅つきは保護者会からの発案です。最近はお正月でも餅つきをする家はあまりないので、ぜひ、子どもたちに体験させたいという要望がありました。ですが私たち職員もみんな初めてですし、保護者のみなさんも、やったことのある人はほとんどいないようなので、どうなることか……」

●田中佳子園長

初めての餅つき体験

調理室で炊いた餅米が、園庭の一角に据えられた臼の中へ入れられ、餅つきスタート。まずは男性保育士とお父さんが杵で餅米をこね始めたが、「こうかな?」「こうでいいのかな?」と、初めての体験におっかなびっくり。そんな様子を、子どもたちもちょっと遠巻きにしながら眺めている。しばらくして、ぺったん、ぺったんと調子が出てくると「やりたい!」と、積極的に言い出したのは女の子たちだ。子ども用のサイズとはいえ、長くて重たい杵をぐらぐらさせながらも、先生やお父さんにサポートしてもらいながら、笑顔で餅をつき始めた。次は男の子。ほとんど、一緒についてくれるお父さんの腕にぶら下がっているだけのようにも見えるが、その表情は真剣だ。お散歩から帰ってきた1歳児たちも餅つきに加わる。小さい手で杵を支えるのはいかにも大変そうだが、周りから「よいしょ!」とかけ声をかけられると、嬉しそうな笑顔を見せた。

三々五々と集まってくる保護者と子どもたちの数に餅が足りるのか、ちょっと心配になったが、餅米は次々と炊きあがってきた。餅つきも、一人、保護者のなかに子どもの頃から餅つきをしていたというお父さんが登場し、お手本を見せてくれていた。つき上がった餅を丸め、きな粉をつけたり、海苔で巻いてくれるのは保護者会のお母さんたち。園舎のテラスに道具を並べてスタンバイしている。第1弾の餅がつき上がると、テラスのお母さんたちの前には、さっそく子どもたちの列ができた。

「おいしい!」「やわらか〜い!」とあちこちから歓声があがる。どうやら、柔らかいもの、硬いものと、つき上がりにはムラがある。だが子どもたちにはそれよりも「自分でついた」という満足感の方が重要なようだ。

●小さい手に力を込めて、みんな、一生懸命ぺったん、ぺったん

地域の緑の拠点として

今回の助成を契機に植栽を整備した園庭の広さは約221㎡。その一部に、常緑低木のマサキをアーチ状に組んでつくった緑のトンネルと、芝生を敷き詰めたひょうたん型の大小二つの小さな築山をつくった。大きい築山の真ん中にはシイノキを、小さい築山の真ん中にはジューンベリーを植樹。他にもヤマモモやスモモ、ブラックベリーなどの実のなる樹木も植樹して、いずれはこれらの果実を使い、子どもたちと一緒にジャムづくりをしようという計画だ。また石ころだらけだった土壌を改良するため、土もたくさん入れたという。

名古屋市郊外のこの地域は、駅前に緑道があるものの、周辺は大型の病院や町工場に囲まれ、あまり緑が感じられる環境ではなかった。このため木登りができるような、少し大きな木を植えたいという希望があったそうだ。

「できれば、最初から木登りできるくらい大きな木を入れたかったのですが、予算的に幼木しか入れられなくて。ですがシイノキなので、5年もたてば大きく育つはず。気長に育てます」と田中園長は笑いながら言う。

今はシイノキを支えている支柱によじのぼろうとする子もいるようだが、木が大きく育てば、子どもたちは自然と木登りに挑戦するようになるのだろう。

「園庭に緑が育ったので、今日のような屋外イベントを開催しても、なんとなく周りに佇んで、おしゃべりしたり、子どもと遊んだりすることができますが、緑が何もなかった時はとても殺風景で、そんな雰囲気ではありませんでした。それが今日は、餅つきをしていない子は緑のトンネルをくぐったり、築山の周りを走ったり、何気なく自然と触れ合っていて、自分なりの遊びをつくり出しています。やはり環境が子どもたちに与える影響は、とても大きいですね」

園庭には、今年初めての卒園生の記念として植樹されたキンモクセイもあった。田中園長はこれからも、卒園記念に毎年1本ずつ植樹していきたいと考えているが「保護者の方から〈園長、ここを森にするつもり?!〉って言われ

●たくさんの家族が園庭に集まって、盛況な餅つき大会に

上●緑のトンネルをくぐり抜け、築山の周りを走り回る子どもたち
右●植栽が整備され、緑豊かに生まれ変わった園庭

ちゃいました」と笑う。だが、園児の思い出と共に木が増え、それらは新しい子どもたちと共に育っていき、やがてこの住宅街の一角に小さな森ができるというイメージは、なかなかロマンチックだ。子どもたちもずっと、自分と保育園、そして地域とのつながりを感じ続けることができるのではないだろうか。

神奈川県川崎市 ひよし保育園

体験から学ぶ、自然いっぱいの園庭

遊びの幅を広げる遊具

川崎市の公立保育園だった日吉保育園が民間移管されるかたちで2015年4月1日に開園した「ひよし保育園」。これに伴い新設された園舎は、約338㎡の園庭に面して緩やかにカーブを描く、半円形の2階建て。建物の両端には木製の外階段が設置され、その片側の一部がすべり台となって遊具に連動するという、遊び心のあるつくりになっている。

「園舎を新築するにあたっては、職員もみんなで意見を出しあって考えました。どの部屋も園庭に向かって窓が大きくとってあるので、とても明るいんですよ」

泉田美恵子園長は、笑顔でそう教えてくれる。

日当りがいいとあって、広々とした園庭の上には日よけネットが張り渡されていた。5月から真夏のような日差しが注いだ今年は、早々に準備したのだという。その広い園庭には、階段から続くすべり台以外、目立った遊具はなかった。本来は、子どもたちがより多彩にからだを動かす機会がもてるようにと、大型遊具を設置したいと考えていたが、そこまでの予算を確保できなかったのだという。

●泉田美恵子園長

「ですから今回、助成をいただくことができたので、自分たちの手作業も含め、いろいろと園庭を充実させることができました」

その一つが、外階段の下に設置されたアスレチック風のロープでできたトンネルとぶら下がり棒だ。じつは、訪ねた日の5日ほど前に設置されたばかりとのことで、子どもたちは興味津々。毎日、通園するなり何人もが集まって、宙に浮いた状態のトンネルをくぐり抜けたり、棒にぶら下がったり、時にはトンネルを乗り物に見立ててゴッコ遊びをしたりと、さまざまな遊びを編み出しているのだという。

泥んこになっての田植え体験

ただ、本日のメインイベントは他にある。5歳児のクラスがみんなで田植えをするというのだ。もちろんこの田んぼも、今回の助成事業によって整備されたものである。

●広々とした園庭を、緩やかなカーブを描く半円形の園舎が囲むひよし保育園

●アスレチックロープでできたトンネルをくぐり抜ける女の子。その表情はどこか得意げ（photo: 室井謙一）

田んぼがあるのは、ロープのトンネル遊具がある裏手。もともとは駐輪場として使われていた園庭の一角に、三畳ほどの広さをもつ田んぼをつくったのだ。

「じつは、遊具の設置だけで助成額の八割以上かかっているので、田んぼは基本的に、子どもたちと一緒に石拾いをしながらの手づくりです。先日、初めて水を引いて沼のようになった時には、子どもたちはすでに、ここで泥んこ遊びをしたんですよ」と泉田園長。ただこの時は、初めての泥んこ体験を怖がって、中に入れない子どももいたという。「だから今日も、ムリには入らなくていいよって、言ってあります」と教えてくれる。

●ヒザまで泥につかって、田植えに挑戦。大騒ぎしながらも、なかなか上手に植えていく

さて、汚れてもいいように、半ズボンに黒っぽいシャツを着た子どもたちは裸足になって、田んぼの前に整列。まずは先生がお手本を見せてくれる。「ちゃんと苗の根っこをもって、指をのばして土の中に入れるのよ」「田んぼに入れる子は入ってもいいし、入らずに、外から手を伸ばして植えてもいいですよ」。苗を少しずつ手渡された子どもたちは、「僕、田んぼに入れるよ!」「私も入る!」と威勢よく声をあげるが、ヒザの下までずぶずぶと泥んこに埋まっていくと「ヒェ～!」「動けないよー!」「ギャー!」と奇声が上がる。だが、いったん入ってしまえば怖いものなしだ。ヒジまで泥んこに埋めながら、どんどん苗を植えていく。なかには尻もちをついてズボンまで泥んこになる子もいたが、それがますます面白いようで、周りの子たちと大笑い。そうして気づけば全員が泥んこになっていた。今日は、田んぼに入らない子はいなかったのだ。

「これから順調に稲が育ってくれれば、9月には稲刈りができるはずです。そうしたらみんなで割り箸と牛乳パックを使っての脱穀をして、おにぎりにして食べようという計画です。またその間にはアメンボやトンボもくるでしょうし、稲の花が咲いたら観察もしたいと思っています。子どもたちはここで、いろんな体験ができるはずです」

のびのび育つおおらかな雰囲気

この他にも、今回の助成によって園庭には畑とビオトープもつくられた。それぞれ小さなスペースだが、畑にはナスやキュウリ、トマト、ピーマンといった夏野菜が植えられ、実りを待っている。ビオトープはエントランス脇の、幅50cmほどの細長い花壇スペースを2～3m、深さに差異をつけるかたちで掘り返してつくられた。そこに水草を入れ、金魚やメダカ、オタマジャクシを飼っている。訪ねた日、オタマジャクシは小さなカエルに変わり始めており、卵を抱えたメダカの姿も見られた。

「田植えも、メダカの産卵を見るのも、棒にぶら下がったりすることも、子どもたちにとっては貴重な体験。そんな体験から学ぶことを、私たちは大切にしています。土に触れ、生き物に触れ、身をもって体験したことは、必ず子どもたちの心とからだを豊かに成長させてくれます」

ひよし保育園には、生き物がのびのびと育つ、自然の雰囲気が濃厚に漂っている。それは、田んぼや畑の作物や、ビオトープで生物が育てられているから、というだけではない。子どもたちが自分で考え、行動する、その自主性を重んじ、のびのびと保育しようとする園の姿勢が、保育園全体に、おおらかな空気感を漂わせているに違いない。

左●コンクリートブロックで囲いをつくった小さな畑。夏野菜がすくすく成長している
右●エントランス脇につくられたビオトープ。覗き込むとメダカが卵を抱えていた

●薪ストーブが設置された園舎内のホール。暖かな雰囲気が満ちている

back number

今号と関連する特集号をPick Up
（その他は特集タイトルのみ）

No.1 特集「都市の幹線道路」（1984.2）**在庫切れ**

No.2 特集「都市公園」（1984.5）**在庫切れ**

No.3 特集「都市と河川」（1984.12）

No.4 特集「子どものための都市計画」（1985.6）**在庫切れ**

No.5 特集「都市と盛り場」（1985.12）

No.6 特集「都市生活と神社仏閣」（1986.5）

No.7 特集「住宅地の道路と家並み」（1986.9）

No.8 特集「都市とヒューマンスケール」（1987.3）

No.9 特集「都市と水辺」（1987.7）**在庫切れ**

No.10 特集「都市の景観」（1987.12）**在庫切れ**

No.11 特集「都市と防火」（1988.7）**在庫切れ**

No.12 特集「都市とアメニティ」（1988.12）**在庫切れ**

No.13 特集「都市と運河」（1989.8）

No.14 特集「都市再開発とアーバンデザイン」（1989.12）

No.15 特集「アミューズメントと都市」（1990.3）

No.16 特集「高齢化社会と都市」（1990.6）**在庫切れ**

No.17 特集「私鉄と歩んだ都市」（1990.9）

No.18 特集「都市とホール」（1990.12）

No.19 特集「エコロジー都市」（1991.3）

No.20 特集「新・集合住宅論」（1991.6）

No.21 特集「新・リゾート論」（1991.9）

No.22 特集「都市と商業空間」（1991.12）

No.23 特集「都市の民俗誌」（1992.3）

No.24 特集「都市と緑化」（1992.6）

No.25 特集「公共建築のデザイン」（1992.9）

- 府県庁舎のデザインの変遷｜石田潤一郎
- 座談会｜デザイン時代の公共建築｜磯田桂史＋長谷川逸子＋柏木博
- 公共空間における屋外彫刻｜石川健次
- ルポ｜地方公共団体の庁舎デザインを巡って
- 公共建築の試み｜川端直志
- 市民の領域―公共性の誕生と変遷｜若林幹夫
- 連載｜都市を拓いた人々・8 那覇｜吉田豊

No.26 特集「都市と高層ビル」（1992.12）

No.27 特集「住宅の間取り」（1993.3）

No.28 特集「都市と広告」（1993.6）

No.29 特集「都市の上水道」（1993.9）

No.30 特集「都市の保存」（1993.12）

No.31 特集「ミュージアムと都市」（1994.3）

No.32 特集「プレハブ住宅」（1994.6）

No.33 特集「都市の色彩」（1994.9）

No.34 特集「観光都市の条件」（1994.12）

No.35 特集「都市と下水道」（1995.3）

No.36 特集「マンションのメンテナンス」（1995.6）

No.37 特集「都市と歩道空間」（1995.9）

No.38 特集「ゴミとリサイクル」（1995.12）

No.39 特集「住宅の水まわり」（1996.3）

No.40 特集「都市の駐車空間」（1996.6）

No.41 特集「橋のデザイン」（1996.9）

No.42 特集「建築と木材」（1996.12）

No.43 特集「輸入住宅」（1997.3）

No.44 特集「都市と学校」（1997.6）

No.45 特集「環境共生型まちづくり」（1997.9）

No.46 特集「都市と情報化」（1997.12）

No.47 特集「老いない住宅」（1998.3）

No.48 特集「都市と駅舎」（1998.6）

No.49 特集「住宅のコスト」（1998.9）

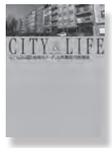
No.50 特集「路面電車ルネサンス」（1998.12）

No.51 特集「ヒトが集まる、まちがにぎわう―集客都市へ」（1999.3）

No.52 特集「シルバー・ハウジング」（1999.6）

No.53 特集「NPOとまちづくり」（1999.9）

No.54 特集「地域のノード、公共施設の新潮流」（1999.12）



- 座談会｜都市と公共性―公共空間が秘める都市再生の可能性｜長谷川逸子＋竹村真一＋若林幹夫
- 今、公共施設に何が求められているか
- ケーススタディ｜ノードとしての公共施設
- まちづくりと公共施設
- 連載｜高齢社会のまちづくり・3
- 連載｜都市を拓いた人々・32 川越

No.55 特集「都市公園の未来」（2000.3）

No.56 特集「まちづくりの新しいパラダイム」（2000.6）

No.57 特集「島のまちづくりに学ぶ｜沖縄編」（2000.9）

No.58 特集「地域に開く大学」（2000.12）

No.59 特集「危機管理のまちづくり」（2001.3）

No.60 特集「保存―都市と建築、過去と未来をつなぐもの」（2001.6）

No.61 特集「30代建築家の都市イメージ」（2001.9）

- 平坦な戦場に生きる遅れてきた者たち―若手建築家による都市のイメージ｜五十嵐太郎
- プロポーザル｜ぼくらはこんな都市を考えている｜SSC（SS再生計画実行委員会）／project.co.jp／みかんぐみ／アトリエ第5建築界宮本佳明／SML（西牟田奈々＋和田江身子）／T*O
- 対談｜東京って「かわいい」?｜香山リカ＋貝島桃代
- インタビュー｜資本主義の核心部にタッチし続ける第三世代の建築家たち｜隈研吾
- 戦後日本の建築家は都市をどう描いたか―構築、解体、脱構築、そして……｜若林幹夫

No.62 特集「使う建築、使うまち―都市のストック活用法｜国内編」（2001.12）

No.63 特集「LETS的まちづくり」（2002.3）

No.64 特集「『都心居住』のまちづくり」（2002.6）

No.65 特集「都市はアートで刺激される」（2002.9）

No.66 特集「ランドスケープ・デザインの新展開―地形を活かしたまちづくり」（2002.12）

No.67 特集「スローライフとまちづくり」（2003.3）

No.68 特集「サステナブルな都市“成長”政策―都市計画と長期ビジョン」（2003.6）

No.69 特集「吉祥寺―住みたい町ナンバー1の理由」（2003.9）

No.70 特集「緑の建物づくり」（2003.12）

No.71 特集「都市と観光、新たな視点」（2004.3）

No.72 特集「構造改革特区とまちづくり」（2004.6）

No.73 特集「マルチプル／モビリティ コンパクトシティの条件」（2004.9）

No.74 特集「都市の言説を巡る旅 10のキーワードから探る都市［論］の現在」（2004.12）

No.75 特集「マルチモーダルが都市を楽しくする［ヨーロッパ編］」（2005.3）

No.76 特集「路地・横丁空間からの都市再生」（2005.6）

No.77 特集「公共空間、新たな視点」（2005.9）

No.78 特集「小さな町の豊かな暮らし」（2005.12）

No.79 特集「都市の「良質な」居住環境」（2006.3）

- 座談会｜都市の「良質な」居住の場とは｜小谷部育子＋陣内秀信＋林泰義＋日端康雄
- ケーススタディ｜「良質な」居住空間ってどんな場所｜［戸建て］建築家の競合で「今」の町並みを創出―玉川台デザイナーズ住宅「意匠街」／［タウンハウス］土地の特性を活かした小規模な低層集合住宅―コートデコ尾山台／［建て替え］限られた敷地で居住快適性を目指す―アトラス江戸川アパートメント／［緑地］都市部に出現したグリーンタウン―深沢ハウス／［公団住宅］「公団批判」によって生まれた、集合住宅の新たな住環境―東雲キャナルコートCODAN
- ルポ｜サステナブルな建築がつくる良質な町並み―CASBEE評価の可能性

No.80 特集「エリア・スタディ・シリーズ わが町流まちづくりのすすめ―❶」（2006.6）

No.81 特集「「安全・安心のまちづくり」を考える」（2006.9）

No.82 特集「エリア・スタディ・シリーズ 「ロハス」時代の、「素顔のまま」でまちづくり」（2006.12）

No.83 特集「ジェイン・ジェイコブスの宿題」（2007.3）**重版**

No.84 特集「サイクリング・シティの可能性」（2007.6）

No.85 特集「地図とまち―見る・歩く・つくる」（2007.9）

No.86 特集「エリア・スタディ・シリーズ わが町流まちづくりのすすめ―❷」（2007.12）

No.87 特集「「美味し国」の景観論―フランス、都市景観の新たな創造」（2008.3）

No.88 特集「美味しいまちづくり」（2008.6）

No.89 特集「都市を愉しむいくつかの方法」（2008.9）

No.90 特集「シュリンキング・シティ―縮小する都市の新たなイメージ」（2008.12）

No.91 特集「都市彩譜―まちのいろどりのふ」（2009.3）

No.92 特集「fun town―たのしい・かわいい・やさしいまちづくり」（2009.6）

No.93 特集「マチとムラの幸福のレシピ」（2009.9）

No.94 特集「創造のまちづくり」（2009.12）

No.95 特集「団地ルネッサンス」（2010.3）

No.96 特集「風と土のインダストリー 地場産業の未来」（2010.6）

No.97 特集「新しい公共交通～生活支援ネットワークへ～」（2010.9）

No.98 特集「下北沢から「都市」を考える」（2010.12）**在庫切れ**

No.99 特集「「学校」からのまちづくり」（2011.3）

No.100 特集「21世紀のまちづくり 「情報革命が、都市をどう変えようとしているのか」」（2011.6）

No.101 特集「震災後の地域・コミュニティ・住まい―再生・復興への視点」（2011.9）

No.102 特集「交流住宅―新しい暮らしのかたち」（2011.12）

No.103 特集「時間に暮らす」（2012.3）

No.104 特集「エリア・スタディ・シリーズ 地産地消エネルギーのまちづくり」（2012.6）

No.105 特集「「町おこし」新潮流― 地域に埋もれたコンテンツを発信する」（2012.9）

No.106 特集「子どもの空間とまちづくり」（2012.12）**在庫切れ**

No.107 特集「シティホール―市庁舎の新潮流」（2013.3）

- 寄稿｜市役所とシティホール｜日端康雄
- 対談｜これからの市庁舎―まちづくりのコアになる場所｜隈研吾×五十嵐太郎
- ケーススタディ｜町と人をつなぐ「ノード」としての市庁舎｜シティホールプラザ「アオーレ長岡」／山梨市庁舎／宮代町庁舎／伊根町庁舎・コミュニティセンター「ほっと館」
- 震災復興report・4｜「減災」をキーワードに、産官学とメディアが連携
- 都市を拓いた人々・50｜鶴岡｜高橋兼吉
- 私の好きなまち・くらし・6｜日口交流の歴史を刻む函館（箱館）のまち｜戸沼幸市

No.108 特集「都市の〈隙間〉に集い、憩い、賑わう」（2013.7）

No.109 特集「瀬戸内文化の再生 爺さま、婆さまを元気にする芸術祭」（2013.11）

No.110 特集「都市とサイン」（2014.3）

No.111 特集「自由が丘―暮らしやすさの秘密を探る」（2014.7）

No.112 特集「新しいパートナーシップ―PPP＞PFI＞コンセッション方式」（2014.11）

- インタビュー｜公的ストックを活用した都市のリノベーション｜PPP/PFIの活用が拓く、地方公共団体の未来｜植田和男／便利で愉しい町をつくる、コンセッション方式の可能性｜福田隆之
- note｜PPP/PFIの基礎知識
- ケーススタディ｜PPP/PFIで、わが町流の「まちづくり」｜岩手県紫波町「オガールプロジェクト」―公と民の責任ある連携で、魅力ある「コンテンツ」を実現する／大阪府八尾市「八尾市立病院」―運営型PFI事業で、良好な「協働」関係を生み出す／東京都立川市「立川市子ども未来センター」―「まんが」をテーマとする公共施設で町の賑わいを創出／東京都府中市「ルミエール府中」―図書館と市民会館の複合化により、地域の文化拠点の核となる
- 連載｜スキマファイル・3｜白金・白金台のスキマ 大規模開発のとなりは町工場
- 連載｜子どもたちの「笑顔」に会いに行く・3｜矢本西保育園「四季を通じて楽しむプール」／「薫る風・上原こども園「自然を大切にする心を育む〈環境共生型庭園〉
- 私の好きなまち・くらし・10｜長野市｜山岸健

No.113 特集「新しい図書館」（2015.3）

No.114 特集「空き家―家と暮らしと地域のこれから」（2015.7）

No.115 特集「酒とまちづくり」（2015.11）

No.116 特集「ロスト近代と都市の未来」（2016.3）
- 対談・1｜生態的都市―可能性としてのテリトーリオ｜進士五十八×陣内秀信
- 対談・2｜過疎を逆手に―あえて都市に野生を放つ｜林直樹×姥浦道生
- 対談・3｜都市の潜在能力―ロスト近代・ヘテロトピア・自然の多産性｜内田隆三×橋本努
- グラビア｜parallelismo｜鈴木知之
- スキマファイル・7｜水都大阪、スキマクルージング　水の回廊を巡る
- 子どもたちの「笑顔」に会いに行く・7｜代沢みこころ保育園「荒れた裏庭を、子どもたちの力で楽しい園庭に」／ABCみかげ保育園「くぐってのぼって、無限の空間で膨らむ想像力」

information

平成27年度発行の調査研究報告書

当財団では助成した研究について、その成果である調査研究報告書を発行しています。
平成27年度に発行したものをご紹介します。

戦災復興事業に向けた土地整理手法と補償制度の検討過程に関する研究
藤賀雅人（目白大学社会学部社会情報学科・専任講師）

多様な主体による地域課題の解決を促すプラットフォームの運営・構築手法に関する研究
卯月盛夫（早稲田大学社会科学部・教授）

アメリカにおける景観保護運動の社会学的研究とその日本の都市政策への示唆
堀川三郎（法政大学社会学部・教授）

20世紀都市遺産の評価と継承の概念構築に関する研究　西村幸夫（東京大学先端科学技術研究センター・教授）

社会保障的機能からの新たな住宅整備政策の研究～ドイツにおける制度・研究を参照して～
川久保寛（神奈川県立保健福祉大学保健福祉学部社会福祉学科・講師）

災害時における木造仮設住宅の供給体制に関する研究
江口亨（横浜国立大学大学院都市イノベーション研究院・准教授））

サスティナブルハウジングに向けてのセルフ・リノベーションの計画技術に関する研究
横山俊祐（大阪市立大学大学院工学研究科・教授）

戦後土木施設の歴史・文化的価値に関する基礎的研究　阿部貴弘（日本大学理工学部まちづくり工学科・准教授）

シェア型居住の実態調査に基づくプライベートとコモンを両立する住空間の提案――何をシェアすべきか
本間健太郎（東京大学生産技術研究所・助教）

夜間停電時の津波からの迅速避難を誘導する光環境の構築　小林茂雄（東京都市大学工学部建築学科・教授）

（刊行順。肩書は当時のもの。敬称略）

調査研究報告書をご希望の方には一部2,000円でお頒けしますので、当財団までご連絡願います。
過去の調査研究報告書についてはホームページ（次頁にアドレス）にテーマ、研究者名および要旨等を掲載しています。

第一生命財団について

第一生命財団は、第一生命保険相互会社（現第一生命保険株式会社）からの拠出金をもとに設立された都市のしくみとくらし研究所、地域社会研究所および姿勢研究所が、平成25年4月1日付で合併し発足した一般財団法人です。

当財団は、豊かな次世代社会の創造に寄与することを目的として、少子高齢化社会において、健康で住みやすい社会の実現に向けた調査研究ならびに提案、助成等を行っています。具体的には、これまで取り組んできた「都市とくらし」「コミュニティ」「姿勢と健康」に関する調査研究と啓発活動に加え、社会的に喫緊の課題である「待機児童対策」の一助となるべく、新設の保育所（認定こども園を含む）に対する助成事業および緑豊かな住環境の整備のための都市緑化に関わる助成事業「緑の環境プラン大賞」に取り組んでいます。

●ホームページ　http://group.dai-ichi-life.co.jp/dai-ichi-life-foundation/

city&life no.117 Jul-Oct 2016
2016年7月発行

企画委員　日端康雄（慶應義塾大学名誉教授）
陣内秀信（法政大学教授）
林 泰義（特定非営利活動法人玉川まちづくりハウス運営委員）
大村謙二郎（筑波大学名誉教授）
小泉秀樹（東京大学教授）
小野文夫（当財団常務理事）
佐藤 真（株式会社アルシーヴ社）

編集・発行　一般財団法人 第一生命財団
東京都千代田区平河町1丁目2番10号平河町第一生命ビル2階
電話03-3239-2312

編集協力　株式会社アルシーヴ社
斎藤夕子

デザイン・レイアウト　生沼伸子

印刷　株式会社恒陽社印刷所

頒価500円・送料215円

ISSN 0289-7172
一般財団法人 第一生命財団

city&life no.117 Jul-Oct 2016